

タイムマシン・ガール

「いいかね、いうまでもないことだが」と、時間航行者はつづけた。「どんな物体にしろ、実在するためには、三次元のほかに第四の次元が必要なのだ。長さ、幅、厚み、それと―《持続》という要素だ。ただ、観察者のわれわれが、肉体という不完全なものに制約されて、いつもそれを見逃しがちになるだけのこと。つまりこの世界は四次元から成り立っている。三次までが空間の範疇に属し、四次が時間だ。そのあいだに、とくに差別をつける必要はないのだが、われわれの意識が、生まれてから死ぬまで、一定方向にしか動かないので、それでもつてすすべてを律しようとする。そこでとかく、理解が困難になってくる」

「H・G・ウェルズ／タイムマシン」

また、失敗した。これで十九回目だ。

赤子の新鮮な体で継ぎ直した体がようやく修復しつつあり、わたしは怒りと後悔をようやく巡らせることが出来るようになっていた。つまりこれまでではそれすらも出来ないほどに死にかけていたということだ。この霍青娥が引き際を二度も誤るとは遺憾の極みではあったが、しかししようがないとも頭の片隅では思う。なにせもう一息だったのだ。それなのに最後の最後になってあれが負荷に耐え切れなくなった。

今際の際で出し洩りやがったのだ。忌々しくて、だが舌打ちすらも出来ない。それにわたしののような邪仙に虎の子を託すというの

も、よく考えれば躊躇われる話ではある。だが贋作でもそれなりの成果は出たのだ。このことを報告すれば、本物を貸して貰えるだろう。何しろわたしの拘る件には、仙そのものの去就がかかっているのだ。嫌とは言わせない。

「青娥、何だか嬉しそうだな。元気になったからか？」

「そうね」わたしは床の上で首だけとなった芳香に微笑みかける。表情筋も少しはましになったらしいし、笑っていると分かるほどには怪我も火傷も治ったのだろう。「それよりも体を再建してあげられなくてごめんさいね」

あいつの力によって消し炭にされてしまったのだ。守りを強くしていたとはいえ、頭だけ残ったのは奇跡に近いと思う。

「それは構わないが、顔だけでもお腹は空くんだなあ」

「切られた腕の痛みを感じるといふのはあることだから、失くした

胃が空腹を訴えるというのものもあるかもしれないわね」普通の人間なら胃がなくなれば生きてはいられないから、比較例がないのだけど、人間の体は複雑そうに見えて単純なところもあるから同じ効果が現れているのかもしれない。」「体が治ったらたらふく食べさせてあげるから」

「わあい！ 生きた人間も食っていいか？」

「奮発してあげる。でも帰るまでは備蓄食糧で我慢して頂戴」

「うむ、それなら我慢できるな」

「わたしは寝るわ。芳香も機能を切ってあげる。わたしの体が完全に治るにはまだしばらくかかるだろうし」

「あれはあまり好きではない。意識がなくなつて黒くなつて行くのがまるで死ぬみたいで」

「死んだりしないわよ。わたしがいる限りはね」次もあるのだから

ら、芳香にはまだまだ頑張ってもらわなければならぬ。「信じ
て、ゆっくりお休みなさい」

わたしは芳香に手を伸ばし、休眠用の札を額に貼る。

「お休みなさい。良い夢が見られたらいいな」

わたしの夢は悪夢だらけだが、芳香はそれを知らない。わたしを
気遣ってくれた。だから善い母親のように笑いかけてやる。芳香が
完全に機能を停止すると、わたしは大きく息をつく。

「柄でもない」道具に過度の愛着をもって何の意味もない。
「弱ってるのだわ。わたしも寝ましよう」

芳香と同じ札を額に貼り、わたしは微睡む。全ての機能を止め、
わたしの体は再び緩やかな修復に入るだろう。

夢は全て暗いものだから、せめて何も見ないようにと願いながら、
わたしは長い眠りについた。

歴史概論はオフラインオンリーであるにも拘わらず、卯京都高等学府の教養科目で最も人気の高い集中講義の一つだ。出席すれば単位がもらえるというルーズさもさることながら、やはり時間を跳躍するという現象が多くの人間を惹きつけてやまないからだろう。一番広い講堂だというのにほぼ満席であり、夏であることも手伝って空調が効いているというのにほんのりと蒸し暑い。都市型の環境制御システムが稼働して以来、熱中症になるような猛暑が発生することとはなくなったけれど、それでも夏という季節が完全に払拭されたわけではない。わたしは京都より環境制御のルーズな東京で暮らしてきたから慣れてきているけれど、幼い頃から京都で暮らしてきたメリーには些か厳しいらしい。手をぱたぱたさせ、顔や胸元に風を送

り込もうと躍起になっていて、いつも澄ましている彼女を知るわたしには少しだけ微笑ましい光景ではある。

「全く、これだけ人を集めるからこそオンラインにすれば良いのに。教授の自己顕示欲が恨めしい」いつもは薄紫を基調とした地味なデザインワンピースを身に着けているのだが、今日は諸行無常とプリントされた大きめのTシャツを着ている。オンラインの蚤の市で気に入って買った代物らしいが、メリーの趣味は基本上品ながらたまによく分からなくなる。「手伝いに出される身にもなって欲しいものだわ」

少々お冠のメリーを見ると年下だということを思い出す。最速で十三歳から研究課程に進むことができる今の世の中で一つ二つの差などさして関係ないのであるが、それでも悪い気分ではない。

「まあまあ、実入りの良いバイトなんでしょ？ この夏は色々な場

所に行く予定なんだから、インカムを蓄えておくのは悪くないわ」もともとメリーは最優秀の学生であるから、余程特別なことをしない限りインカムの使い道を問われることはない。それを推してバイトをするのはメリー曰く社会勉強の一環であり、おそらくはわたしへの対抗心であると考えられる。近くの喫茶店でバイトしているわたしを常々、羨ましいと感じていたらしいから。「それにしても紙の教材を使うなんて贅沢よね」

わたしはメリーから受け取ったホチキス止めの小冊子を手に取る。ざらざらとした手触りの紙は昔は安価な消耗品だったらしいが、あらゆるものをデータで扱うようになった現在では粗雑な紙とというのは逆に高級品なのである。この講義がオフラインであるのに流行る理由の一つだろう。この講義を毎年取り仕切る教授はとにかくアナログに拘る。メリーによれば心理学部の授業はオンラインで

行うのだが、この歴史概論だけが例外なのだという。

どぎつい赤の表紙に、古めかしい字体で『歴史概論』と書かれている。コントラストがきつくて読みにくいのも狙ってやっているのだろうし、中を開けば更なる驚きが待っている。なんと目次から本文から奥付に至るまで全て手書きなのである。六十ページほどの冊子なので相当の手間がかかっていることは間違いない。流暢でかっきりした文字なので読みやすいのだが、電子組板に比べると無駄が多い。

「ホチキスで止めて綴じ部分にカラーテープを貼る作業の面倒臭いことといったら。楽しいと思っただのは最初の十部くらいまでだったわ」

「ご苦労様。終わったら肩でも揉んであげようか？」

「別に凝ってないからいいわ」メリーはすげなく断ると、何故かわ

たしをじろりと睨みつけてくる。「連子は何かと理由をつけてわたしに触ろうとするわね」

「柔らかくて良い匂いのする女の子なんだから手つかずは勿体ないでしょ？ それともわたしに触られたくない理由でもあるの？」

卯京都高等学府は講堂やサークル活動用の棟、大学寮といった前時代的な施設の残る珍しい学府であるが講義の大半はオンラインであるし、お互いにプライベートを持っている。わたしはメリーと一緒じゃない時は大半をバイトに費やし、残った時間を勉強とオカルトスポット探索に費やしている。本来、十三歳組……ストレートで中等寮を出た者にはバイトの必要などないのだが両親に育てられたことによるインタフェース不全障碍によって不就労インカムの審査が無駄に厳しい。学業に関することならばほぼノータイムで審査に通るがプライベート、というよりサークル活動を楽しむにはバイト

が不可欠というわけだ。メリーは障碍がなくて優秀なのでバイトをする必要はなく、空き時間で恋人との逢瀬に励んでいる可能性もな
くはない。というか卒寮してから最初の一、二年は余程の変わり者
でない限りそうしたパートナーを探すのが通例であるし推奨もされ
ている。都市は常に過密状態であり、シングルよりもマルチで暮ら
して欲しいのだろう。かくいうわたしもメリーに一度、一緒に住ま
ないかと誘ってみたけれど割と必死に拒否されてしまったという過
去があるわけだが、意中の人が居続けているとなれば辻褃が通ると
思ったのである。

「そんなものはないわ」長々と組み立てた推論をメリーはあっさり
と壊し、大きく溜息をつく。「正直言うところのこと聞かれるの
さえ億劫よ」

「ふうん、メリーって初心なんだ」

「なにそれ、初心なんて死語も良いところじゃない。蓮子こそ姿格好といいいつも古風だし、貞操観念とかお固そう」

「貞操観念だなんて、それこそかちこちの死語よ。ふんだ、メリーがわたしのことなんて考えてるか分かったわ。恋の一つもしたことのないおぼこ娘だと思ってるんでしょ？」

「違うの？」メリーが興味津々で聞いてくるから、作り話の一つでもしてやろうかと思っただけれど、プライバシーなんてものはいまや紙よりも薄い世の中である。メリーは上品だからログウオーキングなんてしないはずだけど、嘘をついて得することはない。「好きな男の人がいたりするんじゃない？」

「いないわよ。それに男かどうかなんて限らないじゃない。メリーこそ価値観が前時代的よ」

出産が完全に人間の外部で行われるようになったこの世の中で

は、異性愛と同性愛を区別する必要はない。異性愛至上主義だったり男根主義を振りかざす輩はいるけれど、それは最早生物学的必要性に駆られたものではなく一信条に過ぎない。心理学を修めているメリーはそのことをわたしよりも知っているはずだ。

「もしかしてメリーは基督教派のヘテロ主義だったりする？」宗教を縁にした性信条は大分薄まってはいるけれど、存在しないわけではない。「生まれも育ちも京都だって聞いてたけど」

「そうよ。だから宗教的なバイアスはかかってないつもり。さっきのは言葉の綾だから気にしないで頂戴」メリーは務めて素っ気なくそう言う。あまり触れて欲しくない点だったのか目に見えて機嫌が悪くなっていた。わたしの機嫌が乱高下するのは稀によくあることだけどメリーがそうなるのは珍しい。「教授の呼び出しがあったからわたしは行くわ。講義の後も片付けとか色々あるから、先に帰っ

ちやって」

メリーはそそくさと立ち上がり壇上に向かう。謝りそびれてしまったせいでもややが残ったけれど、顔を合わせて言い難いことだから、夜にPMでも投げっておこうと決め、タスクに追加しておこうと手を動かす。だが上手く記憶できなかつた。わたしだけでなくそこかしこで拡張記憶にアクセスできなくなつたらしく、講義室の至る所からざわめきが聞こえてきた。

「静粛に」壇上から張りのある壮年男性の声が聞こえてくる。黒縁の眼鏡に堂々とした髭を蓄えた、二昔前の研究室でしか見られないような研究者面であつた。「許可を得て室内における拡張記憶へのアクセスを禁止させて頂いた。これも授業の一環だと考えてもらえると嬉しい」

皆の戸惑いが愉快と言わんばかり、教授は大きく顔を綻ばせる。

歴史学科のサイトに掲載されている生真面目そうな写真とはまるで雰囲気違った。

「これから二時間ほど静聴して頂ければ幸いだが、紙の冊子が目当てならばそれだけ回収してすぐに出て行ってもいいし、授業が退屈ならばさっさと眠ってくれて構わない。それらの行為によって単位が損なわれることはないと思つて頂きたい。ただし無駄で意味のない質問や意見に対しては容赦なく不可をつけるだろう」

何ともばっさり生徒を切り捨てたものである。これも前時代の大学風味であり、同様のかちこちな教授に指導されている身としては特に衝撃もないが、中にはひそひそと話し合うものもある。教授は声が静まるのを辛抱強く待ち、十人ほどの退席者に対して愉快스러운笑みを見せてから改めて出席者をぐるりと見渡す。

「さて、ご静聴頂く前に一つわたしから質問をしよう。講義に先ん

じてわたしは君たちに紙の冊子を配ったのだが、その理由を察しているものはいるかね？」

もどかしそうにしているものはいたが、先程の「意味のない質問や意見には不可を与える」という先制パンチが利いているためか誰も発言しようとしなない。その様子に教授は意地悪そうな笑みを浮かべており、性格が悪いことこの上ないなと溜息をつきたくなる。どうやら天はこうした性格破綻者に才能を与えるらしい。

もちろん生徒たちも高等学府に集う秀才たちであり、甘んじて屈辱を享受するわけではない。わたしは割とどうでも良かったので答えを待っていたのだが、教授はそんな魂胆を見抜いたのかわたしに目をつけてしまった。

「その暇そうにしている女生徒、名前は宇佐見蓮子君だったかな？」教授は拡張記憶を照らすことなくあっさりとうわたしのフル

ネームを呼ぶ。受講希望者のデータは前もって集めているといっても、何百人分もあればそうそう覚えられるものではないのだが。

「岡崎研の人間ならさぞかし素晴らしい意見が出るのだろうね」

岡崎研と口にした時の、微かにこもった悪意にわたしは溜息をつく。あの女があらゆる場所に敵を持っているせいで、わたしまでこうした棘をしょっちゅうあてられるのだ。わたしは歴史の研究にタイムマシンが使われているという現状を基にした推測を口にする。「過去に移動するとき、当時の技術で再現できることを知っていなければならぬということ、事例として示すためではないでしょうか？」

拡張記憶を使えないから自信はなかったが、おそらく間違いないはずだった。

「可だな」教授はわたしの答えをばつさりと切り捨て、冊子を掲げ

て皆に見せる。「当時の技術程度がいかなるものか、知識として得ることは簡単だ。我々には拡張記憶があり、必要な情報にリンクー
ジすれば良い。わたしのような化石なら兎も角、ここにいるような
若者ならば誰もがシームレスに実行できる」

わたしが情報障碍者であることを教授が知っていて言っているな
らば大した悪意だ。わたしはさして気にならないけれど、メリーが
わたしの友人であると不都合なことがあるかもしれない。あるいは
うんざりするほどバイトに疲れていたのもそのせいであるかもしれ
ない。

「いまこの講堂はあらゆる情報から遮断されており、目の前にある
のは紙の冊子だけだ。二十一世紀までの、未成熟で無駄な代物だ」
教授は過去の文化をあざ笑うように口元を歪める。「君たちはいま
そのことを実感している。経験している。過去に行き、その一員の

ように行動するにおいてそれはとても大事なことだ。わたしたちの想像力は、無限に飛躍すると考えるむきもあるようだが」

また岡崎研への当てこすりであり、いい加減少しばかりうんざりしてくる。

「実際は所属する時代とその前後という僅かな幅によって制限される。だから時間跳躍者はその時間について学び、肌身に受ける。国家、社会、経済、宗教、技術程度を再現し、言葉も学び直す。二十世紀に飛ぶならば、わたしたちは紙の感触に慣れなければならぬ。手で文字を書けなければならない。筆記は必須科目だが、毛筆や羽根ペン、万年筆の使い方などほとんどの者が知らないだろう」

そもそもそのようなもの、触れたこともないというのが大半のはずだ。わたしも父が使っているのを幼い頃に何度か見たきりだ。

「衣服にしてもそうだし雑味の多い自然食品に口を慣らす必要があ

る。この時代の機械や工芸品を持って行くなどもつてのほかで、極めつけは当時の知識についてあまりに無知であるならば、そうした人間は通り抜けることすらもできないのだ。身につけなければならぬ知識が山ほどあり、拡張記憶がない時代は今だとほぼ確実に行ける時代にすら到達が困難だったらしい。それでも当時を肌で感じることができるという誘惑には多くの人間が惹きつけられ、必然的に応募率も上がり優れた才能が選定されるようになった。わたしたちの時代における数学者たちにも比肩する知恵の集団だったが、拡張記憶の開発によって多岐に渡る知識の記憶が容易くなっていった。古臭い文献を調べる必要もなくなり、しかも過去を覗くことによって得られた正確な事実によって歴史学科の質は急速に落ちていった。歴史などは訳の分からない機械をただいじるだけの、お手軽なものに成り下がったわけだ。まあそれ自体は別に嘆かわしいこ

とでもないのだがね」

教授はそこで軽く苦笑してみせたが、腹に据えかねたものはあるのだろう。そこで一度黙り込み、辺りをぐるりと見回した。何か質問を寄越せという意味なのだろうが、余計なことを口にして単位を落とすなどという危険を犯す者がそうそういるはずもない。あるいはこの状況を作ることと溜飲を下げようとしているのかもしれない、だとしたらやはり意地の悪い奴だと思う。

「質問があります」そう言って手を上げたのはメリーだった。「拡張記憶が埋め込まれたままで、過去へ飛べるものなのでしょうか？」

「拡張記憶の知識も含めて総合的に判断しているのだろう」

「ではその、判断しているものとは？」あまりに曖昧な物言いであり、わたしは問いを挟まずにはいられなかった。「その正体を知る

ことはできたのですか？」

「そうした原理原則というものは、我らの領分ではない。数学者や物理学者が躍起になって探さなければならぬものだ」引っかけられたと分かったのは、教授が嫌らしい笑みを浮かべるのとほぼ同時だった。メリーの質問はおそらく意図的で、ねばねばした糸で張られた巣にわたしがかかるのを待ち受けていたのだ。メリーを通してわたしの好奇心が猫をも殺すことを存じているに違いない。「それが分かればより詳細な過去への探検が可能になるだろう。未踏時代なんてものが今も残っているはずはない」

歴史を理解できないのは数理学者の罪であると皆が納得した訳ではないだろう。ここにはわたしと同じ数理屋もいるのだから。それでもある程度の納得は得られてしまったようであり、わたしはその象徴として冷たい視線を向けられてしまったのだった。対して教授

には熱い視線が集まっていく。

「知っているものも多いと思うが、タイムマシンの実用化は一般的に二〇三九年とされている。試験運用はその数年前から行われてきたようだが、ホーキングなど名だたる研究者が否定していたものがあっさり完成してしまったわけだな。しかし学のない一般人が一期騒ぎ立てたような理想郷への更新なんてことはできなかった。

ヴェルヌの小説に書かれていたような平行世界横断説でさえもなく、過去改変不可能原理と呼ばれる未だ我々にも完全には理解されていない、ふざけた法則で片付けられているのだ」

それから数分ほど物理学者への愚痴を織り交ぜ、それがまた人を惹きつける内容や示唆に富んでいるのが憎たらしかった。わたしはこれからも教授の敵役にされ、メリーすらも味方にはなってくれない。先程の質問からしてぐるである可能性が高い。始まる前に愚痴

を零してみせたのもそうした意図をわたしから隠すためだったのだ。何ともあくどいことであり、わたしはこの講義が終わったから天然物ミルクのジェラートでも奢らせようと心に決めるのだった。

教授は一頻りの愚痴を終え、すると講習者たちの心も随分とほぐれたのか、次は関係者でない所から質問が発せられた。

「未踏時代とは、わたしたちがまだ見ることできていない時代のことですよね？　そうしたものの例をお話頂けると嬉しいのですが」

教授はふむと頷き、質問をした生徒はほっと息をつく。

「先にも述べたが、過去への跳躍条件は因果律を過度に崩さないという一点に集約される。それを決めているのが何かは分からないが、経験からそれはどうやら確からしい。そのことを前提に置いて欲しいのだが、些細なことで因果律が崩れるような、例えば動乱の

時代へは転移できない場合が多い。その範囲が十年を越えるような空白を歴史家たちは未踏時代とは呼んでいるのだがそれはさしたる問題ではない。前後の記録を参照することで容易に間隙を埋められるからだ。では歴史家に分からない過去はなくなったのか？」

教授は己で問うておきながら大袈裟に首を横に振る。

「その通りと言いたいところだが、いくつか例外がある。かつてはアクセスできていた時代が急に封鎖されてしまう場合があるのだ。その中でも現在最大のものが一年前に発生した、西暦四七四年から七百二十二年の約二百五十年にわたる大きな未踏時代だ」

それだけの長い時間封鎖されるようなことが過去にあったか、わたしは拙い歴史の知識を総動員してみたが当てはまるものは特に見当たらなかった。

「それだけの空白だから正確な期間を掴むのに歴史家たちは四苦八

苦しなればならなかつた。その突破口が切り開かれたのは空白が
発生してから数ヶ月後、この卯京都学府であつた。何故だか分かる
かね？」

この学府の研究員が偉大だつたからと茶化して見ようとも思つた
が、また馬鹿にされるのも嫌だつたし、すぐ妥当そうな答えに辿り
着いたので特に誰からも手が上がらなければ答えてみるつもりだつ
た。だがそんなことをする必要もなく参加者の一人がおずおず手を
あげた。

「その原因が日本人であるから、でしようか？」

「然り。これまでに収集した情報を探っても結果が得られず、かつ
て研究の対象とされていた歴史書にほとんど投げ遣りな気持ちで目
を通していたら、たまたま聖徳太子と呼ばれる『架空』人物の生年
と没年が上手く合致していたのだ」

聖徳太子なる人物ならわたしも臆気に聞いたことがある。かつてこの国にいたとされる偉人であり、一時期は紙幣の顔にもなったほどだが二十一世紀の初頭には既に虚構説が有力になっていたはずだ。

「聖徳太子は五七四年から六二二年まで生きてとされている。新しく生まれた未踏時代からどちらも丁度百年離れており、架空であることを差し引いても符丁がぴたりと合い過ぎる。実存の偉人に該当する者を見つけ出せなかったことも間接的ではあるがこの説を裏付けている。らしいで語るのは何とも遺憾だが」

少し疲れたように見えるのは、彼が今もこのことに翻弄されているからであろうか。だが続きを語るその顔に淀みは見られなかった。

「では聖徳太子なる架空の偉人にフォーカスされた封鎖であるとし

て、何故斯様なことが起きるのか？」その問いに答えられるのならば、教授の悩みも解決するのだろうか、示唆を与えられるものさえこの場にはいないようであった。「そもそも聖徳太子とは何者なのか、架空の人物であるとしたらどうして実在するよう周到に記録が残されたのか。もちろんタイムマシンを持つ我々はその答えを知っている。西暦六百年前後、この国には蘇我馬子という優秀な政治家がいた。彼はこの国に仏教を広め、律令を整え、度量衡を統一し、また隋と対等の立場で接するよう唱えて使者を送つてもいる。もちろん彼だけの功績ではないし、馬子自身には新しいことを生み出すような力はさしてなかったのだが、彼は己が分を弁え、優れた人物を貴賤なく扱えるという無二の才能があつたのだな。息子の蝦夷、孫の入鹿も同様であり、蘇我氏はこの国の最初の礎を作つた。だがそんな蘇我氏の栄光も長くは続かなかつた。彼らは王家を蔑ろにす

ることが多々あり、それを忌々しく思った中大兄皇子率いる勢力に襲われ、闇討ちに近い形で滅ぼされてしまったのだ」

教授はそこまで一息で語り、メモを取りたいのにと戸惑う生徒たちを満足げに眺める。筆記具を用意しないというのは講義であるというのに不親切極まりないのだがこれも歴史の制約というものを体感させるためであって、単なる意地悪ではないはずだ。

「今日わたしが語ることは概ね渡した冊子に書いてあるから安心するように」どこのページかを教えないのは手で調べろという意味なのだろう。さっきから脈絡ない発言も見られると思っていたのだが、全て計算して行っているようだ。どうやらわたしの予想以上に頭が回るらしい。「さて話の続きだ。新たに天下を取った皇子だが、これまで多大な支持を受けていた蘇我氏を無理矢理除いたのは皇家を蔑ろにしていたといっても篡奪者の謗りを逃れることはでき

なかつた。そこで彼の参謀であつた中臣鎌足という男が一計を演じた。馬子を強力に補佐する優秀な皇族の存在を蘇我氏はこれまでずっとひた隠しにしてきたのだという偽の歴史を巧みに語り、真実と分からないように混ぜ合わせたのだ。そのために作られたのが聖徳太子という存在だつた。聡明の極みにして十の話を聞き分けて豊聡耳と尊称され、隋の仕組みを学んで十七条の憲法、冠位十二階といった律令の基礎を発案し、更には仏教説話と基にしたであろう伝説的な逸話で彩つたのだ。ここまで来ると一種の執念だが、それほどまでにして蘇我氏の影響を取り除かなければならなかつたのだらう」

まるで物語を作るよう、歴史に一人の傑物を追加し、辻褄を合わせる。確かに気の遠くなるような作業である。

「中臣鎌足を始め、彼の子孫も歴史を積極的に改変した。氏族の名

声を高めるためかは知らないが、そうした虚栄心のため千年以上も欺かれてきた代々の歴史家は惨め極まりないと言えるだろう。二十世紀半ばから二十一世紀にかけてそうした偽史は次々と暴かれ、また政治の道具としても利用されたため一時期は歴史家が狼少年と同義だったこともあったらしい。知性を奪うことはしたが、だから我々はどうしてもタイムマシンを厭うことができないというわけだ」

自嘲気味に言うと教授は講習者をぐるりと見渡す。

「以上が聖徳太子なる架空人物の来歴であるのだが、如何なる理由で封鎖されてしまったのかは結局のところ分からずじまいだ。かなり詳しく偽史を洗い出しては見たし、類似事例とも照らし合わせてみたのだが」

「類似事例というと同じことが起きているのですか？」

講習者の一人がそう訊ね、教授は大きく頷く。

「今回の件を除いて一番新しい事例が今から十年前で、一九一〇年から一九二二年が封鎖された。ぴんと来た者もいるかもしれないが、ちょうど第一次大戦の前後だ。封鎖は一月ほど解除されたのだが、どうしてこんなことが起きたのか、これも突き止めることはできずにいる」

第一次大戦ならばわたしも少しは知っている。日本が未曾有の発展を果たし、また凋落する遠因となった戦いであるからだ。

「かの戦争は一九一六年から一九二二年にかけて主に欧州で繰り広げられた。イギリスを中心とした連合軍とドイツを中心にした同盟軍の軋轢は一九一四年に起きたセルビアの皇太子暗殺未遂事件に端を發し、二年かけて徐々に圧力を増していった。そしてドイツ軍の通商破壊工作によって誤射を受けた豪華客船の沈没によってイギリ

スの国民感情が爆発、戦争に至ったというわけだ。自国民を千人以上も殺され、しかも氷山との激突ということにして誤魔化そうとしたドイツの卑劣さが引き金となったため戦いは引き所を知らずに拡大し続け、アメリカとロシアの介入がなければ尚も長引いたとされている」

正確には搾り取れるだけ搾り取ったからお開きにさせたというのが正しいだろう。世界への影響力を失った欧州諸国は植民地に対してより高圧的な介入を行い、そのために各地で独立運動が激化した。日本とアメリカは気に乗じて東南アジア諸国に食指を延ばし、宗主国として入れ替わっていった。この段階で燃料や資源への橋頭堡を築くことに成功した日本はしかし、なまじ力を得てしまったために次の世界大戦で総力戦、本土決戦という二つの愚を行い、人口の八分の一をも失うことになったのだ。

「歴史家の仕事は終わったという向きもあるが少なくともこうした問題が解決されない限り、その役目がなくなってしまふことはないだろう。時間というものはわたしたち人類に対し、心を許したわけではない。ただ連綿と残酷に流れるだけなのだ。歴史に手を伸ばすならばそのことを忘れてはならない」

教授は綺麗に話を締め括るとわざとらしく冊子を開いた。

「さて、導入も終わったことだしここからは通常の講義に移るとしよう。眠たくなったらさっさと帰っても構わないぞ」

しかし開始直後と違い、誰も出て行くことはなかった。それからの一時間半は導入の二十分を丁寧になぞるといふものであったが、その派手さが効いてか講義の内容がするすると入ってくるのである。講義が終わり、拡張記憶が解放された頃には意地悪されたことなどすっかり忘れてしまっていた。

講義が終わってからしばし、わたしはすっかりと人のいなくなつてしまつた講堂に残り続けていた。メリーは先に帰つていいと言つたけれど、わたしに伝えることがあるはずだと考えたからだ。はたしてメリーは片付けが終わるとわたしの前に来て手を合わせた。

「その態度じゃやはり、教授と貴女はぐるだつたのね」

「導入をスリリングに行くには、何も知らない対決者が必要だと言つて聞かなかつたの。わたしは何度も止めたんだけど、上に手を回して許可を取り付けたから何も言えなかつたのよ」

メリーは泣き出しそうな顔をしており、わたしに隠し事をしていたことを本当に悪いと思つているようだ。こちらとしても特に責めるつもりはなく、しかも当の教授が人の良さそうな笑顔を浮かべてこちらに近付いてくるので完全に棘を抜かれてしまつた。

「いやいや、流石は岡崎さん。このお弟子さんだ。良い反応を返してくれた、感謝するよ」

「お役に立てたなら幸いです。さてメリー」

わたしは先程心の中で決めたことをメリーに突きつける。

「借りを一つ。本当は天然物のアイスを奢ってもらおうと思ったけど講義自体は楽しかったし、これくらいで勘弁しておいてあげるわ」

わたしの寛容さにメリーは息をつき、教授は傍から見て微笑ましくと言わんばかりに笑う。

「後追いになるが、宇佐見君にも給金か類するものを与える必要があると思うのだが」

「その枠があるならメリーの分に足しておいてください。わたしは十分稼いでるし、メリーの稼いだインカムは多分、わたしとの旅行

や倶楽部活動に使うはずですから」

教授はそれ以上、特に何も言うことなく頷く。

「了解した。では片付けも終わつたし、まだ話し足りないようだからお邪魔虫は退散するでしょう」

そうして教授は立ち去り、その日は夏休みの予定を示し合わせて解散となつたのである。

先の講義から数日後、わたしは秘匿通信で蓮子に呼び出された。

場所はわたしたちが倶楽部活動をする時に集まる喫茶店であり、つまりは新しい案件が持ち込まれるということだ。これで先の件は貸し借りなしと書かれていたので、もしかするとやや物騒な場所に向かうのかもしれないが、今回に限れば反対する権利もないのだら

う。天然物のデザートや珈琲を奢らされる続けるのに比べれば余程ましではありそうだった。

まあ、多少の嗜好品ならば用途を聞かれずとも買えるのだが、拙いながらもアルバイトをしてお金を稼いでみると、いちいち気になつてしまうのである。吝嗇家にはなりたくないが、お金を使うことにはもう少しだけ神経質になりたいと思う。蓮子はお金を自分で稼ぐことが多いのに、その辺りは大雑把だから、何とも豪胆である。あるいはあれで一線を超えないよう、気を付けているのかもしれない。蓮子は適当でいて、いざという時の引き際は心得ている。いつもは諫める側だけど、深入りすることがあればそれはいつもわたしなのだ。そうした時の頼もしさ、足取りの軽さ、手の温かみを思い出すと、自然と溜息が漏れる。

何となく落ち着かなくなつて、時計を見ると待ち合わせ時間を十

一分超過している。蓮子は講義を始めとして時間通りであることを旨としているのだが、ことわたしと待ち合わせる時だけ大きく外して来る。大抵は遅刻し、たまに早く来て待ち受けておりそんな時は笑いながら遅いと言うのである。蓮子も遅刻するのだからわたしも思った時に限ってそうなのだから半ば嫌がらせの類である。以前に理由を聞いたことはあるのだが、蓮子は波長が上手く合わないというだけだ。そんな理由でいつも待たされるのは勘弁して欲しいが、その後わたしはこう特別な絆っぽいものがあるのかなと、愉快そうな顔で返されると何も言えなかった。美人というのは狡いなと思う。

「全く、忌々しい……」

「ん、どしたのいきなりそんなこと言って」誰にも聞かれないはずの独り言を捉えられ、わたしは思わず声をした方を見る。蓮子は怪

訝そんな顔をしていた。「忌々しいだなんて、古風な言い回しよね」

「いつの間に来ていたの？」

「ほんのついさつきかな。声をかけようとしたんだけどあまりに深く考え込んでいるようだったから。メリーって思考を遮られるの、あんまり好きじゃないから」気を使われたと知って、わたしは微かに俯く。いつもは鈍感そうでも意外に見られているのだ。わたしが望むようには見ていないけれど、それでも少し嬉しかった。「それよりも急な呼び出しに応じてくれてすまんこつてす」

「蓮子の招集はいつも急じゃない」そう指摘すると蓮子はだらしなく笑い、マスターに声をかける。今日のお任せで二人分、何とも大雑把だが天然物を奮発して頼むのではない限りは他所の店でもそんなものだし、蓮子は珈琲にカフェインしか求めていない。舌を焼く

ような苦さがあればいいのだ。「わたしの分はハーフで」

マスターは分かってますと言わんばかりに頷く。常連とは言わな
いまでも、白人はこの国だとまだ珍しいから把握するのも早いのだ
ろう。じろじろ見られることが多いのはあまり好かないけれど、こ
うした利点もあるのだ。

「砂糖もミルクも入れるんでしょ、メリーって大人びてるけど嗜好
は子供っぽいよね」

カフェインに弱いというのもあるのだが、何となく弱みを晒すよ
うだし、気を利かされそうな気がして蓮子には話せずにいるのだ。
そんなことを口にするともなくつんとしている、蓮子がデイス
プレイを出し、指で弾いてわたしに寄越した。公開通信の内容を無
許可で集積、独自のエンジンでジャンル分けするアングラサイトの
一つで、許可申請済サイトにはない豊富なカテゴリー、タギング

が売りの一つらしい。蓮子はこのようなサイトをいくつかチェックしており、オカルトや類するタグを調べて活動向きの情報を仕入れてくるのであるが、いまディスプレイに表示されているのは卯京大学府の近くにある共同墓地についてだった。

わたしと蓮子は以前、蓮台野と呼ばれる葬地の一つを訪れたことがあるのだけど、ここで話題になっているのは現代に生きるわたしたちのためのそれだ。京都は超過密状態にあり、名を記しての埋葬というものが古くから土地を持つていくごく一部の人間を除いて許可されないのである。京都に点在する墓地は記名埋葬者たちの墓石と卒塔婆が並び、あとはマンションをそのままミニチュア化したような納骨施設が無機質に並んでいる。そんな場所に不思議など何も無いと思うのだが、敷地内で奇妙な人影を見た者がいるという情報が集まっていた。中華風の服装をし、額に妙なお札を貼った少女らし

き怪物が歯を剥き出しにして追いかけてきて、命からがら逃げ延びた。知り合いの友人がその辺りで行方不明になったらしいけどもしかして、などなどである。

「別にこれオカルトでも何でもなく変質者ってだけじゃないの？」
人を襲う変質者なら一刻も早く捕まえてサナトリウム送りにする必要があるけれど秘封倶楽部の活動にするような内容とは思えなかった。

「もっと先まで読んでみてよ、そしたら分かるって」
じれったそうに促す蓮子へはいはいと返事をし、最後の通信内容を読んでみるうち、わたしは思わず目を細めてしまう。妙な服装の少女が突然、地面に空いた穴から飛び出して襲いかかってきたと書いてあったからだ。

「この共同墓地に境界が存在するかもしれない？」

「前にメリーが夢で行った場所もおっかない女の子がいたんでしょ？　そしてここで出てくるのも女の子よ。関係があるかどうかは分からないけど」

「調べてみる価値はある？」蓮子はまるで犬のように何度も頷く。つぶらな瞳を向け続けられて逆らえるほどわたしは鬼ではないのだった。「分かったわ。先の件はこれで貸し借りなしってこと？」

「まあそういうことかな。じゃあ今夜八時、卯京都学府の総合キャンパス前で」

「うん、了解……」今日の今日で遅れないようにと付け足すつもりだったけれど、わたしの目はふと喫茶店を出ていく女性を捉えてしまった。青を基調とした中華風のドレス、輪上に編まれた髪型。

「遅れてくるようだったらさっさと帰るから」

「分かってるって」蓮子は苦笑いをし、やってきた珈琲を啜る。

「今度は当たりだと良いな」

わたしは心の中でまさかと呟く。京都には中国系もかなりの数いるのだから、あのような姿をした女性がいてもおかしくないはずだし、ましてや怪談の主などではないはずだ。わたしは咄嗟に撮った写真を照合にかける。青沼葉子、二十四歳という情報を先頭にしてこれまでの経歴や現在の職業があっさりと現れる。ここから徒歩で十分ほどの所にある中華飯店に勤めているらしい。どうやら取り越し苦労だったようで、わたしは大きく息をつき、珈琲を一口啜って舌を出す。

砂糖とミルクを入れるのをすっかり忘れてしまっていたからだ。

予想するまでもなく、指定した時間になっても蓮子は待ち合わせ場所に現れなかった。研究棟にも部室棟にもちらほらと明かりが

灯っていて一人でいても問題はないのだが、あまり落ち着かないのは確かだ。まだ都市機能が整う前の京都では、出自の不明な殺人事件や傷害が多発していた時期もあつたらしいが、そんな時代の遺物にも似た殺人鬼に遭遇するかもしれないと思うとやはりぞつとしな
いものがある。

「こんばんは」だからいきなり背後から蓮子でない女性の声が聞こえたとき、思わず肩を震わせてしまった。「うふふ、少し怖がらせ
たみたいね」

振り向くとそこには喫茶店で姿を見た女性がいて、岡持を右手に
持っている。

「女の子が一人というのは危ないわよ。時間を気にしているようだ
けど待ち合わせ？」

「はい。友人を待っているんです」

「ふうん、何だか恋人を待つようなそわそわした感じだったけど」
わたしは女をきつく睨む。鋭いのか冗談かは分からないがどちらにしても気に入らない。

「おお、こわいこわい。最近の娘は冗談が通じないのね。まあそこが可愛らしいけど」

「心配してくださいるのは有り難いですけど、まだ仕事が残っているのでしょう？」

唐辛子のきつい匂いが岡持から漂ってくるのである。喫茶店で軽く菓子を摘まんで以降は何も食べておらず、お腹を容赦なく刺激してくるのだった。

「そうね。それでは逢瀬を楽しんでくださいませ」

女はそう言う優雅に歩み去っていく。忌々しいと思いつつ睨みつけると、丁度その方向から蓮子がやってきたので、わたしは慌

てて眉間を指で撫でつけた。

「ごめんごめん。今日は間に合うと思ってたんだけど」

「そう思うならもっと頻繁に時間を確認しなさい」

「してるって、遅刻する度にプラス一回。でも何故か間に合わないんだよね」

そんなことをしているならば間に合わないはずがないから蓮子なりの弁解というか冗談なのだろう。昔はもつと強い剣幕で怒っていた気もするけれど今では一種の病気と考えているし、わたしは時は金なりというさもしい観念では動いていない。

「先にごはん行く？ それとも共同墓地へ直行する？」

「少し食べてきたから」

今になって興が乗らないとも言えず、わたしは早く済ませるために嘘をつく。蓮子は特に反対する様子もなかった。

「そっか、それでは今日の活動を開始しますかね」

蓮子はデイスプレイを呼んで時計を見、それから空を見る。

「よし、寸分違わず」そう言って蓮子は満足そうに頷く。全ての端末はタイムサーバから定期的に時間を取ってきているのだから現実の時間とずれるはずはないのだけど、蓮子曰く同期しないことも稀によくあるらしい。「位置も場所も完璧、今日は良い夜だわ」

そう言って蓮子は共同墓地と反対方向に歩いていく。少しすると戻ってきて小さく舌を出し、照れ隠しのせいかわたしの手を引いていく。何とも忙しないというかしょうのない人だなと思う。これでもわたしより年上のはずなのだが、そのことをたまに忘れそうになつてしまう。

もちろんそんな素振りを見せず、繋がれた手を離すことなくわたしたちは共同墓地までやって来る。ミニチュアのような建物が所狭

しと並び、辺りに比べて明かりが少ないためか妙に寒々しい気がしてならない。蓮子もそれは感じ取っているのか、手に込める力を強くする。まるで子供のようだった。

「わたしやメリーも死んだらここに入るのかな？」

「そうね、京都所属なのだから。もっとも十分に古くなったら遺骨は廃棄するらしいけど」人死にの量にもよるけれど平均十年といつたところらしい。「永遠に埋葬されたいなら、古くから墓を持つていた人たちの家族になるしかないわけ。蓮子はそういうのに憧れるほう？」

「わたしはそういう湿っぽい嫌だな。少しの間は悲しんで欲しいけどさ、何十年も参られ続けるというのは重たいかな。そういうメリーはどうなの？」

「生も死もさして差のない世の中よ、どうにでもすれば良いわ」

「わたしもドライなほうだけどメリーは大概ね。心理学専攻ってこういうとき強いな、理屈で完全に処理できてしまうんだもの」

わたしとてそこまで割り切っているわけではないし、心理学専攻だからといって心を完全に制御できているわけではない。もしそんな鉄面皮だと思われているならば少し寂しい気がするけれど、蓮子は理想のわたしを羨ましそうに見ていて何とも言えない気持ちになるのだった。

わたしはそっと手を離し、建ち並ぶ納骨施設を貫く大通りを進んでいく。すると奥の方からふらふらと、誰かがこちらへやってくるのが見えた。先程のこともあるって立ち止まり、何者かと身構えることしばし、手桶と柄杓を手にした老婆だということが分かってきた。顔は皺だらけで髪の毛は真っ白だが足取りはしつかりとしており、よく見ると桶には枯れて茶色になった草花が入っていた。生の

犬や猫ほどではないにしろ、生の献花というのは珍しい。もしかすると土地持ちなのかもしれない。

わたしが軽く会釈すると老婆は足を止め、値踏みするようにじろじろと眺め回してきた。

「ここでは見かけない顔だ。ごく最近になって伴侶をなくした風でもない。単なる冷やかしならば人の死が近い場所へは迂闊に近寄らないことだ」

「冷やかしというわけではありません」わたしは黙ってやり過ごすつもりだったのだが、蓮子は老婆の前に立ち堂々と嘘をつく。「この辺りで最近、不審者を見たという目撃証言がありました」

「見回りでもしているわけかい？ 年頃の少女二人で、しかも何の心得もないのだとしたら的になるだけだからやめておきなさい」
「いやいや、わたしはこうみても卯京都カラデの有段者でして」

本当はネットで護身術をかじった程度なのだが老婆になら通じると思ったらしく、蓮子はそれらしい構えを取る。次の瞬間にはその鼻先に柄杓がつきつけられていた。

「今のわたしの一撃すら避けられないならば、本当の墓地に潜んでいる輩に勝てるはずもない。さっさと引き返すべきだ」

「あなたはこの先にいるものが何か、ご存じなのですか？」

「その異人さんの方が余程分別があるね」老婆は柄杓を手桶の中に収めると小さく息をつく。「少なくともわたしは何も遭わなかった」

「つまりこの先に危険はないと？」老婆の呟きは全て理解できないにしろ、そのように受け止めることはできる。「不審人物などいないから調べるだけ無駄だと言うんですね？」

「それはわたしが判断することではない。そちらの不満そうな顔の

嬢ちゃんは、何がなんでも調べなければ納得しないだろうし、もしかするとそれで何かが見つかる可能性もある」

老婆の発言は言っただけで、来いとも取れるし、わたしや蓮子ならば見つけれられるかもしれないと示唆しているようでもある。

「人間には幻想を視る力があるのだから。それも若いほど感じ取りやすい。わたしの衰えきつた感性では捉えられないものを見てしまう可能性はある」

わたしと蓮子は目を合わせ、それから蓮子が一步前に入る。

「わたしたちはそれを見るために活動しています」そう言って蓮子は大きく頭を下げる。「先程は誤魔化すようなことを言っただけ、申し訳ありませんでした」

「そんなことは最初から分かっていたよ」老婆は蓮子やわたしを叱るのかと思いきや、微かに笑むのみだった。「一つだけ言ってお

く。何であろうと、見てしまったものには責任を持たなければならぬよ。それがどんなに恐ろしいものであっても、目を背けたくなくなるものであっても」

蓮子は躊躇うことなく頷き、わたしもあとに続く。

「もし見えてしまったらわたしの墓を目指しなさい。花が備えてあるからすぐ分かるはずだ」

「わたしの墓？」驚きのあまり、言葉だけで思考が出てこなかった。「それはどういう……」

だが老婆は一つ瞬く間に忽然と姿を消していた。蓮子は乾いた笑みを浮かべ、わたしは混乱のあまり何も言うことができなかつた。

「あの人が、ここをうろついていたという？」

おそろおそろ訊ねると、少しして蓮子は大きく首を横に振る。

「話にあったのは若い少女の目撃例だったはずよ。つまりあれは……」

…今回の件と関係ない怪奇現象？」

そんな都合の良いことがあるものかと思つたが、かといつて対案を思いついたわけでもなく。

「ねえ蓮子、やっぱりやめておいたほうが良いんじゃない？」

「一つ起こつたということは、同じようなことが起こりやすくなつていられるかもしれない。わたしは続行するべきだと判断するわ」

わたしは蓮子の意見に承伏しかねた。確からしいと思つてしまつたからこそ、より危ないからだ。しかし蓮子はわたしが引き返せば一人でも先に進みそうだし、今回の活動は蓮子への貸しを返すという意味合いもあるのだから、とことんまで付き合わなければならぬ。

「では付いていくけれど、まずいと思つたら引きずつても連れて戻るから」

「そうね。メリーの目ならばそれが分かる。だから本当にそうだとしたらわたしは従うわ」

蓮子はそう言ってわたしの手を握る。わたしは蓮子の手を握り返し、老婆のやってきた方へ進む。すると文明の色がすつと消え、資料で見たことがあるだけの簡素な竹垣が、その隙間からうつつすらと古風な墓石や卒塔婆が見えてくる。門は簡素な鉄柵で、鍵はかかっている。警告が発せられる様子もないから入場制限はないらしいが、先にも増して明かりがなく月や星を頼りにしなければならぬほどだった。

蓮子は手を離すと鉄柵門に手をかける。ぎし、と鈍い音を立てて門は外側に押し開けられる。すると土の臭い、木々の臭い、騒がしい程の虫の声が内側からむつと溢れてくる。ここでは都市と全く異なる自然が根付いているらしい。これが共同ではない、本物の墓地

というわけだ。

「この墓の一つ一つに、一族の遺骨が埋められ続けているのかしら」

「火葬の習慣がない頃からあるのだとしたら、白骨化した死体がまるまるかもしれない」わたしはぼろぼろの骨が組み合わさって人間のように動く様を想像してしまい、何だか滑稽だなと感じてしまった。「肉がついていないのだから動くはずがないけど」

「動く死体の伝説って昔から色々な国に伝わっているらしいけどね」

「つまり蓮子はリビングデッドがここにいると？」

「分からない。でもそうだったら良いかなとは思ったわ。死んでも動く方法があるってことだもの」

蓮子が死体を動かす方法を探しているなんて、初めて聞いた気が

する。

「ネクロファンタジアの体現者ならば境界と接したところのある可能性は高いでしょ？」

「なるほど、そういうことなのね」わたしは蓮子が死者の蘇生だなどという戯言を口にするのではないかと恐れていたのだ。「ぞつとしない話ではあるけど」

蓮子は墓地に入っただけの正面、木造の小さなお堂に視線を向ける。寺社仏閣の類は基本的に都が管理しているのだが、宗教復古運動前に建てられたものならば過去の遺物として嚴重に保持されているはずである。それなのに目の前の名もなき寺はあと数十年もあれば倒壊することは間違いなさそうであるのに、人の手が一切入っていない。

「お寺にしては古過ぎるなあ。それになんか全体的に遅いという

か」蓮子は空を見上げると目を何度も瞬かせ、ディスプレイを呼び出して首を大きく傾げた。「二一一年八月五日、二〇時一七分十二秒。だけどわたしが視た限りだと一秒だけ遅い。わたしの能力がおかしくなってるのかな？」

わたしも墓地の周りを見回してみるが、境界の類を視ることはできなかつた。

「誤差ではないと思うわ。蓮子の力はいつでも世界と同じくらいに正しいのだから」

「だよね、わたしもそう信じたいけど……」蓮子は再度空を見上げ、徐々に顔を青くする。「二一一年八月五日、二〇時十七分十二秒……十二秒……十二秒！」

蓮子は素早く後ろを向き、しかし次のリアクションを起こさない。わたしも続けて振り向き、その理由をすぐに察した。いまさつ

き入ってきたはずの門がなくなっており、そして墓地が延々と遠くまで続いているのである。四方八方があつという間に遠ざかり、逃げ場がなくなつてしまった。

「この空は紛い物よ、さつきから全く動いてない。誰かが空を投射している、プラネタリウムのように！」

戸を大きく開け放つ音がして、わたしと蓮子は同時に振り返る。そこにはどぎつい赤の服に星の入った紫の帽子、そして額に札の貼られた少女が立っていた。彼女は手を前に突きだし、飛び跳ねながら徐々にこちらへと近付いてくる。捕まったら逃げられないと五感以外に訴えるものがあり、わたしと蓮子は同時に背を向けて逃げ出していた。もしかするとこれは単なる幻覚で門も普通に存在しているかもしれないと期待したがその考えは甘かつたようで、いくら走っても外に出られなかつた。

「空はずっと動かないままよ。メリーの方は？」

「駄目、何も視えない！」 現と夢の境目さえ視られるわたしの眼だった。この場所からは一本の線すら見つけられなかった。「不自然なくらいに閉じられてるに違いないわ」

つまり人為的に封をされているということだ。手足の突っ張った少女によるものか他に黒幕がいるのかは分からないが、どちらにしてもここから逃げさなければならぬ。

「……て、ほし……かせよ」わたしも蓮子も全速力で走っているはずなのに、背後からは少女の声が微かに聞こえてくる。「わたし……おまえ……くう……」

「あいつわたしたちを食うつもりなの？」 所々聞き取れなかったが、そのようなニュアンスであることはわたしにも分かった。「姿を消した人たちはあの子の胃袋の中だっただってこと？」

さっと見ただけだったが、どちらかと言えば線の細い少女だった。人間をまるごと頂くようには見えなかったが、しかしこの世ならざる気配を感じたことも確かだった。

「さっきの老婆はこいつらのことを分かってたのかな？」

「そうだとしても、強行したのはわたしよ」

蓮子は息を荒げながら、わたしにちらと視線を向ける。

「そんな蓮子に付いていったのだからわたしも同罪よ」

わたしはそう口にし、蓮子だけでも何とか助けてやらなければという気持ちになる。必死で走っていて体は火照っているけれど頭は涼しく冴えてきて、すると先程の老婆の言葉を思い出した。

『花の備えてあるお墓を探して』

それで蓮子も思い出したのか、辺りをきよろきよろと見回し始める。この改変された空間の中で見つけられるのか不安ではあったけ

れど、少しすると蓮子がある方向を指さす。わたしが視線を向けると菊の花の鮮やかな黄色が、そして墓石を亀裂のようにはしる境界が視えた。まるで何者かが鋭く断ち切ったかのような見事な境目であり、危機も忘れてほれぼれするところだった。

「蓮子、ここから逃げ出すことが……」できると言いたかったが、わたしはそれを飲み込むことしかできなかった。例の少女が墓の目の前に着地したからだ。「うそ、どうやって……」

「ここならわたしだって、少しの時間なら空を飛べる」随分と長い間追いかけてきたはずなのに、お札の少女は息一つ切らしていなかった。「さあ、観念してわたしの言うことを……」

だからわたしは素早く前に飛び出し、少女に体当たりをお見舞いしてやった。

「蓮子、その墓に飛び込んで！　そうすれば逃げられる！」

どうやら手足は自由にならないようで馬乗りになられてじたばたしていたが、すぐに横合いから固いものが飛んできて、わたしは弾き飛ばされてしまった。骨は折れていないようだが、脇腹がずきずき痛んで立ち上がれそうにない。だがわたしは苦しみながらも小さく微笑む。蓮子の姿がいなくなっていたからだ。きつと上手く逃げられたのだろう。

「おのれ、わたしはあいつを、捕まえなければ、ならなかつたのに！」お札の少女はうずくまるわたしの腹を思い切り蹴り飛ばし、仰向けにする。「折角見つけた星読博士を！ このっ！ このっ！」

わたしは最後の力を振り絞って地面を転がり、境界のはしつた墓にぶつかる。涙で滲んでいるためか眼の見えが悪くて、そのために墓石そのものと掘られた文字を見ることができた。

『魂魄家之墓』

そのすぐ左には新しい堀り口でこう刻まれている。

『この地で生まれた幻想の全てが眠る場所』

わたしは最後の力でその文字に手を伸ばし。

体がするりと抜け、闇の中へと転落していった。

気が付くとわたしは集合墓地の入口に立っていた。本当ならばメリーを救出するべきだがわたしは歯を食い縛って元来た道に戻る。何の手段も持たずに戻ったならば今度こそ抜け出せないかもしれないから。かといって誰かに助けを呼べるわけでもなく、わたしは相棒を置いて一人で逃げ出したも同じだった。数分ほど走り、もうすぐで卯京都学府というところでわたしは足を止め、右手の親指を耳に、小指を口元に当てる。境界暴きの禁を知られればわたしはただではすまないだろうが、何もしないわけにはいかなかった。メリーは止めようとしたのに、わたしが強引に誘ってしまったからだ。

「どうしたのですか？」電話をかけようとすると背後から、つまり

わたしが走ってきた方向から声がかかる。振り向くと手に岡持を持ち、古いデザインの青いドレスを着た女性が立っていた。髪を輪のように結ってあり、かんざしのようなものを差しているのが何とも奇抜であった。「まるでこの世ならざるものを見たかのようにすわ」

頭に札をつけた恐ろしい少女が追ってきたなどと口にはできず、わたしは咄嗟にお茶を濁す。

「不審な人物にいきなり追いかけてこここまで逃げてきたんです。その、貴女は見ませんでした？」

「不審な人物？」彼女は両手で顔を隠し、少ししてぱっと離す。わたしは悲鳴をあげないようにするので精一杯だった。そこにはわたしを追いかけていた少女の顔があったからだ。「それはこんな顔だったかしら」

女性は元の顔に戻ると指をぱちんと鳴らし、すると体の力が抜けて立っていられなくなる。

「まさかわたしの構築した仙界から逃れるなんて。星読博士としての力だけではなく、そんな力まで隠し持っているとは思わなかったわ」わたしとメリーをあの子に襲わせたのはお前かと言いたかったのに、舌にすら力が入らない。「魔術師としての牙を隠し持っていたとしても、最早逃れることはできないわ」

魔術師はわたしではなくメリーの方だ。わたしは月と星で位置と時間を捕捉することしかできない。

「さあ、わたしと一緒に来てもらいましょう」

メリーをどうしたの？ どこへやったの？ もしメリーを食べさせたなら付いていくつもりなんてない、ここで舌を噛んで死んでやる。その意味を込めて舌を出したのだが女性はけらけらと笑うだけ

だたった。

「こんなになってもあかんべえだなんて威勢が良いのね。わたしでは手に余るかもしれない」女性は地面に手を当て、まるで野菜を抜くようにして人間を引きずり出す。そいつはわたしとメリーを襲った本人だった。「あのね、わたしだって手荒いことをするつもりはないの。折角手に入った星読博士なんだから。でも抵抗するようだったら腕の一本くらいなくなっても良いのよ。用があるのは貴女の眼だけだから」彼女はわたしに特別な眼を持っていると知っている。あるいはあの場所がそのことを測定するために作られた空間なのかもしれない。「さあ芳香、そいつを背負って連れて……」

最後まで口にすることなく、青娥がその場から飛び退く。固いものを打ち付けあう鋭い音がして、わたしの体は同時に自由を取り戻す。後ろ姿だけど先程見かけた老婆であることはすぐに分かった。

どうやら柄杓で殴りかかったらしい。

「妙な仕掛けを張っているとは思ったが、特に害意もなしとして見逃していたのに」老婆はもう片方の手に手桶を持ったまま片手で柄杓を構える。それだけで独特の緊張感がこの場に生まれた気がした。「間合いに入れば容赦なく斬る。入らずともこの場に居続けるならばいずれ斬る。どちらが良いかね？」

老婆らしくない弾んだ声であり、まるでこのような鉄火場を求めていたかのようにだった。

「そのようなもので、斬れるものなどあろうものか！」

芳香と呼ばれた札付きの少女が両手を伸ばしたまま素早く飛びかかる。

「駄目よ芳香、離れなさい！」女性の静止にも芳香は怯むことなく、老婆はそれを見てから素早く柄杓を振るう。気付けば手足のこ

とごとくが地面に落ち芳香は地面に倒れ伏していた。血が噴き出すことはなかったが、切断面からとろりと黒い液体がこぼれ落ちていく。「だから言わんこっちゃない！」

青い女性は糸をくいと引くような動作をし、すると手足が芳香本体に引き寄せられていき、あつという間にぴたりとくつついた。もう一度同じ動作をすると、芳香は地面を引きずられていった。

「ううすまぬ……あつという間にやられてしまった」

「尸人の反応速度ではあれはかわせない、気に病むことはないわ」

「斬った感触で見当はついていたがやはり尸人か」そう口にする老婆の手にはいつの間にか二振りの長剣が収まっている。柄杓と手桶が変化したのか、あるいはこれが本当の姿なのかもしれない。

「そっちの女性は仙人だな、しかも生臭い方のだ」

「霍青娥と申します。さて御仁、斯様な手練れの名さえも知らぬ無

札をまずはお許しく下さい。そして貴女は一つ誤解をしております。まずはその恐ろしい剣を、鞘に収めてくださいませ」

「騙されないで！　このお札を貼った奴、わたしやメリーを食べようとしたんだから！」わたしは強い味方を得たからというのではないが、霍青娥と名乗った女性を睨みつける。「メリーをどうしたの？　さっさと言いなさい！」

「メリーというのは貴女の隣にいた金髪の女性？」

「そうよ。もしそこのお札を貼った奴が食べたなら絶対に許さないから！」

わたしが強い剣幕で言うとき青娥は芳香をじろりと睨みつけ、無言で拳を落とした。

「このお馬鹿！　食い意地を抑えられないのはゴミだと言ったはずよ！」

「そんなことやってない！ 新鮮な遺骨をたらふく食べて満足して
るからそんな必要はない！」いま割と酷いことを言ったような気も
するが、質せば話が進まないので聞き流しておくことにする。「逃
げようとしたから、星読博士を食べるつもりはないと……」

「じゃあ、メリーはどうしたのよ？」

「知らない！ 最後の最後で逃げられたのだ！ そして同じ場所
は出てこなかった！」

「嘘！ 食べてしまったのを誤魔化すために……」そこまで口にし
たとき、わたし宛てに通信が入ってきた。続いてメリーからの秘匿
通信が網膜に投影される。「総合キャンパスの屋上ってなんでそん
なところにいるのよ！」

メリーはどうやらここから数分も離れていない場所に逃れていた
らしい。同じ境界を潜ったのに異なる場所へ出たのは素養の成せる

技なのかもしれない。わたしはメリーに現在地を発信してそこへ向かうよう連絡し、そのことを皆に説明する。すると芳香は失礼にも、わたしを鋭く指差した。

「ほら見ろ、人を疑うのは泥棒の始まり」ごつと鈍い拳が芳香の上に落とされる。「うう青娥あ、痛くするように殴らないでおくれ」
「痛くしないとたたでさえ腐ってる脳味噌じゃ学習しないでしょ！」青娥は芳香の頭をぐいぐいと押さえ、するとみるみる地面の中に消えていった。「さて誤解も解けたところで、話の続きをよろしいかしら？」

青娥は老婆の顔を見て首を横に振る。二振りの剣はたちまち柄杓と手桶に戻り、老婆は地面に落ちた枯れ花を拾って手桶に収める。

「仰る通り、わたしは尸解によって仙となりました。今はある者に道を説くため尽力しているところです」

「尸人使いの仙人が道を説くとは」老婆は鼻で笑うよう口にする。

「腐っても餅は餅屋というやつかな」

「少々混ざっているようですが喩えとしては間違っています。犯した罪を償うため、やんごとなきお方による使命を果たしている最中なのです」

「それが為政者に徳を説くことか？」青娥が頷くと老婆は大きく息をつく。「この世に道を説くべきカリスマを持った人物がいるとは思えないな。みな十把一絡げだ」

わたしは同意するように頷く。政治というものはまだ生き残っているが、格段の才能がなくても成り立つほど高度にシステム化されている。考えの古い老人は一部、顔を出して活動しているがアノニマスであることがずっと多いのだ。

「その通り、わたしが道を説くべきはこの時代にいません。千五百

年前にいますのですよ」

「今から千五百年前ならば六百年頃、いわゆる飛鳥時代辺りだな」
六百年という数字に、わたしは少しばかり覚えがあった。

「あなたはタイムマシンによつて、その時代に行こうとしているの？」

「タイムマシン……そうね、わたしが使っているのは航時器と呼ばれる仙界の道具なのだけど」わたしには仙界というものが何か分からないが、どうやら科学とは異なるアプローチで時間移動を行う装置を彼女は持っているらしかった。「その装置を起動させるためには星読博士と呼ばれる天体現象の観測者が必要になるのよ。これまでは星読人形と呼ばれる仙具を使っていたのだけど何故か突然、目的の時代へ移動できなくなつてしまったの」

ごく最近になつて似たような話を聞いたような気がして、わたし

は思わず問いかける。

「その現象についていつ頃から始まったのですか？」

「一年くらい前からよ」思った通り、教授の話にあつた未踏時代の発生した時期とほぼ重なるようだった。「動作は正常のはずなのに指定した時間の百年から二百年の前後に移動できないの。だから藁にも縋る気持ちで星読の眼を持った人間を探し始めたの。通信内容を精査して月と星から時間や位置を把握していると申しき人物をリストアップし、一人ずつ網にかけていったわ。貴女の場合はオカルトに弱いからその手の情報を巧みに流したわけだけど」

要するにわたしは前時代的手段にあっさり釣り上げられてしまったというわけだ。

「一秒単位で正確に天体の状態を見抜いたのは貴女が初めてだったわ」

「つまりわたしにその、妖しい器械の一部品になれと？」

「命や健康に別状はないわ、それは保証する。疑わしいならそこのおっかないお婆さんに斬ってもらってもいいわ。まあ一度や二度では死なないけど、とても痛そうなの刀だったし」

「一度や二度で死なないならば死ぬまで斬り続ければいい。一心不乱に打ち続けければ斬れぬものなどはないし殺せぬものもない。わたしはそうして色々なものを斬ってきたよ」

老婆が嬉々として笑むと青娥は嫌そうに顔をしかめた。

「生粋の妖怪殺しなのね。面白そうだから喧嘩をふっかけてみようかなと考えるなくて正解だったわ」

「喧嘩をする気はないよ。堅気を巻き込むのに賛同できないだけさね」

「この子が堅気とは思えないけど」青娥はそう言ってわたしの眼を

まじまじと覗き込んでくる。「まだまだ荒削りだけどそれでも素晴らしい眼だわ。開眼すればどれだけの能力を発揮するのか分からない」

「目は開いてるけどね」そういう意味でないことは分かっていたが、何か言わないとこの目を盗られかねないと思ったのだ。「それよりも装置の補助よね、だったら手伝うわ」

わたしが進んで手を貸そうというのに青娥は渋い顔をした。

「いやに物分かりが怖くて不気味だわ」

「断つたらもつと酷いことさそれさうだし、尸人ってキョンシーのことでしょ？」単語で検索するとすぐにヒットした。かつての中国だとメジャーな怪物で、日本でも一時期ブームになったことがあるらしい。「もし本物だとしたら貴女は人体改造に長けていることになる。それならば進んで協力したほうが双方にとって手間じゃない

し、痛い思いをしなくて済むと考えたのよ」

「それにしたってすぐできる判断じゃない。肝が据わってるのね」
青娥はわたしのことを好意的に感じてくれたらしい。「眼のお陰かしら、それとも親の教育が良かったのかしら」

「後者でないことは確かだね。日本では教育は親のものではなく国のものだから」

「そうよね、たまに忘れてしまおうわ」

青娥は大きく息をつき、それから思い出したようにパーソナルタグを送ってきた。青沼葉子という名前と紐付いて、霍隔飯店という中華料理店を運営していること、天然物を中心としたメニューが揃っており値段も割と手頃で評判の高い店だという情報が伝わってきた。わたしも即座に送り返し、すると青娥は得心したように頷き、地面に穴を空けてその中に消えていく。

「準備が出来たら迎えにいくわ、それまでごきげんよう」

「ではわたしも去るとしよう。どうやら臭いほど危険な女ではなさそうだが、餅米を用意しておくといい。あの尸人には覲面に効くだろうから」

そう言つて老婆は驚くべき跳躍力を見せ、あつという間に姿を消す。だからメリーがやってきた時にはわたし以外誰もいなくなっていた。

「蓮子！ 良かった無事だったのね」メリーはわたしの体を思い切り抱きしめてくる。西洋風というのはこれだから照れ臭いのだけ。今はとても有り難かった。「あいつに追いつかれたと聞いて肝を冷やしたわ」

わたしはメリーの体をぐいと離し、指でおでこを弾く。怒っているのだということなるべくやんわりと伝えたかったのだ。

「あのね、わたしはあんな助けられ方、嬉しくもないの」メリーが不満そうな顔をしたのでわたしは柔らかな頬を両手で摘む。「次からは二人で助かる方法を探す。分かった？」

「う、ひゃい、わひやりまひはー」

メリーが少し涙目になってきたので、わたしはそっと力を緩め、軽く挟み込むようにぱちんとする。

「でもありがとう。わたしのために体を張ってくれて。そのこと自体はとても嬉しかったわ」

わたしの言葉に、メリーは泣きそうな笑顔を浮かべる。

「わひやった…分かったわ。次がないことを祈るけどそうなったときは一蓮托生よ」

「よろしい。ところで話したいことがあるのだけど、ここで立ち話もなんだよね」わたしは学食がまだ空いてることを確認し、そこで

ふと良いことを一つ思いつく。わたしは先程得たタグを早速開き、料金前払い、二人前最上級コースでお願いと打ってみる。一分後、青娥了解、ミスマスの皮からと返ってきて今日の夕飯は高級中華料理になることが決定したのだった。「今日はわたしの奢りよ」

そう高らかに宣言したが、メリーの視線はことのほか冷たい。そして先程までの感動が台無しだと表情で訴えていた。

千載一遇の機会は概ねどんな者にも巡ってくるものだ。もちろんわたしのような人間にも。ましてや好きな人が泊まりに来てくれるなんて、そうあることではないだろう。

もちろんその理由は色艶あるものではなく、例の仙人が掌を返して何かを仕掛けてくるのではないかと蓮子が危惧したからだ。それでわたしはさりげなくどちらかの家に詰めておこうという提案をし、あっさりと通ってしまったのである。大きく胸を撫で下ろした様子を見て、不安に付け込む行動は卑怯だと思ったけれど、わたしはこういう生き物なのだから仕方がない。

「いつ見てもメリーの部屋は華があるね」靴を脱いで、まるで自分の家のように上がる蓮子を見てわたしはある種のと きめきを覚えた

のだが、咳払いに留めて置いた。「カーテンとか自然繊維じゃないわよね？」

「もちろん合成よ」少し無理すれば買えたかもしれないが、細かい刺繍の、良い趣味が分かるようなものなら何でも良かった。「蓮子の部屋が素っ気なさすぎるのよ」

蓮子の部屋は黒一色のカーテンに白のレースカーテン、黒い布団カバーに白い枕カバーと、兎に角モノクロなのである。だからこそわたしは蓮子とまるで正反対の華やかさに部屋を飾るのだ。紫が多めなのは好みだからしょうがないとして。

「わたしには似合わないから。それに白と黒だけでも案外着こなしのパターンはあるものよ」

「わたしと会う時はいつも一緒に癖に」

「あれは一番気合入ってるんだけどな。部屋着とか冬春は黒のロン

グシャツに白のチノパンだし、夏秋は白のノースリーブに黒の短パンだし」

「いや白黒から離れなさいって！」

蓮子はえへへと誤魔化すように笑うだけだ。どうやらその組み合わせに並々ならぬ思い入れがあるらしい。

「まあその辺はさておいてさ」蓮子は座布団を引き寄せてその上に胡座をかいて座る。わたしはこういう時のためのとっておきを冷蔵庫から取り出して持って来る。「むっ、ビールとはメリーも不良さんですなあ」

「いつの時代の話よ」昔はいわゆる成人を迎えなければアルコールの類を買うことは出来なかったのだが、今は国で指定された中等教育機関を卒業すれば良いことになっているのだ。とはいっても最近の健康志向で煙草はもちろんのこと、アルコールやカフェインも槍

玉に挙げられていて、その需要は落ち込む一方らしいが。「蓮子の分も用意してあるけど」

「いやわたしはいいわ。アルコールって酩酊状態になって意識が途切れたり、覚えのない行動を取ったりするって言うじゃない」

「わたしはそういうの好きだけどな」ほろほろ酔っ払っている時の、現実感の緩さ、曖昧さには何故かわたしの心を安堵させるものがあるのだ。「ほんの少しだけ、警戒を取れなくなるほどには飲まないから」

「メリーは怖い思いをしたんだし、たっぷり飲んでぐったり寝てもいいよ。わたしもまあ、そのうち寝るだろうし」

「じゃあ二人でいる意味なんてないじゃない」蓮子が来てくれて嬉しいのに理性的なわたしはそんなことをつい口にしてしまう。「寝込みを襲われたらあつという間に終わってしまおう」

「二人で死ぬなら一人よりは怖くないじゃない？」

「……馬鹿ねえ」

「あつ、もうメリーだったらまたそんな可愛げないことを！
折角良
いこと言ったのになあ」

蓮子は頬を膨らませていたが、機嫌は良さそうだった。

「一人は嫌だよ。生きるのも死ぬのも」

「じゃあ、わたしと暮らしてみる？」流れでさりげなく切り出してみると、蓮子はしばらくきよとんとしていたが、やがて大きく息をついた。「的外れなこと言ったかしら？」

「ううん、メリーは優しいなって。なんかこう、わたしも年上としての威厳を發揮できればいいんだけどな」

「一世紀前なら兎も角、年齢の差なんて気にするものでもないけどな。蓮子は結構古風よね。年上なこと気にしてるなら蓮子さんって

呼んだ方が良いのかしら」

「ぞっとしないわね、まだ宇佐見さんの方がいいわ」蓮子は頬を掻く振りをする。むず痒いということなのだろう。「さっきの話は考えとくけど暫くは一人がいいかな。誰にも煩わされず集中力を発揮したい時ってあるし、メリーこそプライベートに干渉されたくないでしょ？」

「どうしてわたしの話になるのよ」

「メリーはわたしと違って時間あるしさ、綺麗だから。何というかこう、そういう自由を謳歌したいかなと」

わたしは無言で缶のプルを開け、半分ほど一気に飲み干す。素面ではとても言えそうになかったからだ。体内の監視ソフトが一気に警告を寄こしてきたけど構いはしなかった。

「ちよつと、そういう飲み方危ないって。あの仙人よりもまずお酒

で死ぬかもしれないわ」

「三徹の眠気をカフェインタブで誤魔化すよりは余程死なないわよ！」

顔が熱を帯び、気が大きくなってくる。分析できても止められないのだから、アルコールというのはやはり厄介な代物だと思ふ。

「ごめん、デリカシーのないこと言ったわね」

「そういうことじゃないの！」わたしは舌に勢いを付けようと残りの半分も一気に飲み干す。「わたしはそんなのじゃない、誤解されるのさえ我慢できないの！」

目の前がぐわーんと湾曲し、色々なものが歪んで見える。何やら警告の数が凄いいことになってるけど、気にはしない。

「見て、あちらこちらで歪みだらけ。世界の皮膜に穴が空いてるわ。そのうちもっと大きな隙間がぽっかり開くわよー！」

わたしはけらけらと笑う。蓮子は困ったように溜息をつき、眉をへの字にする。

「メリー、貴女酔ってるのよ」

「この家から何時でも冒険に行けるのよ。だからね、やっぱ蓮子はここに住むべきよ」

「だから世界が歪んで見える」

「世界は最初から歪んでるわ。なのに誰もが取り澄まして、正常の振りしてる。そんな態度を取らないで、世界を歪んだままで見られるのは蓮子が初めてだったわ」

「それはわたしだけじゃないと思うけどな」

「歪んだわたしを見てくれたのも。ねえ蓮子、わたしにはわたしをそのように見てくれる人が必要なの」

「よしよし」蓮子はわたしの頭を子供のようには撫でる。「見ててあ

げるし、怖かったら手を繋いであげる。だからね、そんな悲しいこと言わないの」

それで感情の堰が一気に切れて、わたしはわあわあ泣き出してしまった。蓮子が優しく、それゆえに何も分かってくれないし、わたしが望むように見てくれないことが分かって苦しかったからだ。

そしてわたしの記憶はそこで一端途切れる。

目が覚めるとわたしはベッドの上で、体が酷くすーすーした。下着だけの姿だと気付き、慌てて起きると布団が被せてあったのは分かるけれど、無防備な姿なのは変わらない。辺りを見回せば、蓮子が床の上にタオルを敷いて同じく下着姿ですやすやと眠っていた。わたしは咄嗟に昨夜のはしたない行動を思い出し、顔が真っ赤にな

りそうだった。蓮子に変な絡み方をしたのは覚えていないけれど、その先が明瞭ではない。ただ服を脱いだ記憶も畳んだ記憶もないから、いちいち蓮子に世話をされたのだろう。そう考えるだけでも辛かったし、変なことを言っていないかなと心配でならなかった。ここで無防備に眠っているということは決定的なことを告白したり、酒の勢いに任せて襲いかかったりということはなさそうだったが、類することを口にした可能性はある。

ああどうしようかとぼんやりした頭をフル稼働させていると、蓮子がうんと声をあげる。どうやら寝言だと分かってわたしは息をつき、お酒が入ったせいかもしれないともより酸い臭いのする体に眉を潜める。

ダンスからタオルを取り出すと、わたしはさっと体を拭いてから部屋着として用意してあったシャツと短パンに手を通す。こうした

だらしなさは蓮子にあまり見せたくないけれど下着姿を晒すよりはよほどましである。それからわたしの布団を蓮子にかけ、ようやく恥ずかしいものを隠し通してほっとしているところからかくすくす笑いがかえってきた。

「いやいや、面白いものを見せてもらったわ」女の声が、それから首だけがゆつと天井から現れる。「こうした芸にはちっとも驚かないのね。お友達の下着姿には可哀想なくらい取り乱していたのに」

「あなたが霍青娥とかいう仙人ね」

わたしは青娥の戯言を取り合わず逆に訊ねる。

「そのお友達から話を聞いているみたいね。では、彼女に伝えるべきことを次第漏らさず伝えていただきますわ。今日の午後九時、あのお堂の前まで来て頂戴。目的の場所にご案内するわ」そこまで口

にしてから青娥はわたしに嫌らしい笑みを浮かべる。「それでは邪魔したわね。お楽しみを続けて頂戴。まだそれだけの時間は十分に
あるはずよ」

そうして青娥は顔を天井から引っ込める。わたしはじつとそこを視たけれど何も無い。つまり境界の類ではないということだ。

わたしは思わず舌打ちをしてから、一向に目を覚まそうとしない蓮子を見て大きく息をつく。

「お楽しみだったらどれだけ良かったか」

その呟きに答えたのは蓮子のちっとも悩ましく無い唸り声だけで、わたしはもう一度特大の溜息をついたのだった。

メリーと一緒だったからわたしは遅刻することなく墓地に到着し、すると青娥がお堂の前で待っているのが見えた。青娥はわたしたちを中へ案内するにつこり微笑んで見せた。

「時間通りとは素敵なお心がけですわね、では目的の場所に参りましょう。二人とも、手に捕まって頂戴」差し出された両手をわたしとメリーはおおぞと片方ずつ掴み、すると青娥は爪先で床を叩くのだった。同時に大きな穴が空き、わたしたちは落下していく。「時を統べる装置のもとへとご案内するわ」

青娥の穿った穴は寺の床を突き抜け、わたしとメリーはどんどん落ちていく。このまま墜落死することはないと思ったが、はたして徐々に落下速度が落ちてきて、最終的には大理石の床にふわりと着

地した。かなり落ちたはずだが気温も湿度も変わらず、少し埃臭いと感じるだけだった。もしかすると白骨死体がごろごろ転がっているかと思っていたのだが、用途の分からない品物がそこかしこに積み重なっているけれど生臭いものはどこにもない。

「ここが今は入口なの。本当はちゃんとしたドアから入るけど、地中深くに埋まってるから」

そう言って青娥は正面のドアを開ける。追って外に出ると、中央ホールと思しき吹き抜けの部屋に出た。この他に同じ意匠の扉が七つ、異なる漢字のプレートがかけられている。中央には天球議のようなものがドーム上の天井から釣り下がっており、双眼鏡のようなものが付いている。つまり外から中を覗き込むためのものなのだ。その真下には北斗七星のあしらわれた豪華な椅子があり、黒髪の等身大人形が腰掛けている。

青娥が指を鳴らすとぼんやり光っていた天井があつという間に夜空に変わる。単なる意匠ではなくある時間の空を完全に再現していた。

「これは貴女がわたしに見せた時間ね」

わたしの問いに青娥は何も答えず、少しすると人形の口がかたかたと鳴り始め、細長い紙を吐き出し始めた。ごく初期のコンピュータを彷彿とさせる動きで、表情のない顔と相まって不気味なことこの上ない。青娥は適当なところで紙をちぎるとわたしにその内容を見せる。全て漢数字なので読み難いけれど、わたしと同様に星から時間を割り出したようだった。

「これが航時器の要となる星読人形よ」

「そしてわたしにこれと同じことをしろと言うのね」

「イエス。天井から吊された天球議を覗き、外側から目的となる時

間の空を見つめ続けることで固着させる」

「固着って簡単に言うけどどうやってやるの？」

「さあ。この装置は借り物だから。実を言うと星読博士を見つけるという助言は持ち主に受けたの。あるものを受け取りにそいつの元に向かったとき、そのついでに人形を直してもらうつもりだったんだけど、あいつと来たら行き来を繰り返したせいで時が頑なになつておる。もっと正確に見なければ狭間は見つけられないだろうと言ってきたの」

「正確に見れば、過去へ行けるの？」

「さあ、出たとこ勝負ね。あなたの力が時の怒りに敵うのならば、わたしと芳香は再度過去へ飛ばされるでしょう」

「西暦六百年の過去へ？」

「ええ。そこでわたしはある歴史を変えなければならぬの」

わたしは青娥の発言に眉を顰める。過去は変えられないという原理があることを先の講義で習ったばかりだからだ。

「過去を変えることはできないわ」メリーにはより強い確信があるためか、青娥にきつい視線を向ける。普段はおっとりしていても専門分野になると厳しいらしい。「この建物がタイムマシンとして、科学とは別の仕組みでできていたとしても、科学謹製のものと同様の原理はおそらく働くはずよ。だからこそ何度試しても上手く行かなかった。違いかしら？」

「否定はしないわ。でも歴史を変えることはできるのよ。唐突に発生した未踏時代こそその証左、あれはいよいよようねりに耐えきれず過去が改変される時に生まれる徴なの。一九一四年、サラエボでオーストリア皇太子が暗殺されなかったことにされたように」

「……なんですって？」青娥の発言にメリーの目が更に険しくな

る。「サラエボの皇太子暗殺は未遂だったわ。第一次大戦のきっかけではあったかもしれないけれど、直接の原因はドイツの通商破壊工作が誤って英国の客船タイタニック号に魚雷を撃ち込み、沈没させてしまったから。そのために英国の反独感情は一気に爆発し、欧州は泥沼の戦争に突入していったの」

「わたしの歴史ではサラエボで皇太子夫妻が殺害されたし、タイタニック号はその何年も前に氷河に激突して沈没しているわ」

「氷河にぶつかったというのは独軍の言い訳に過ぎないわ」メリーはわざとらしく息をつく。「軽々しく偽史を語るなんて信用ならないわ。するとなに？ 今度は聖徳太子が実在したとでも言い出すわけ？」

「あら、勘が良いじゃない、その通りよ」

「聖徳太子は実在しないと、歴史家は実際に過去へ行っただけを確認した

のよ」

「でも今は見ることができない」青娥がそう言うと、メリーは押し黙ってしまった。「あの霧の中では本来の歴史にいるはずのなかった聖徳太子なる偉人がいるの。けどこの未来ではまだいない。二つの状態が曖昧模糊としているため、未来からの観測者には見せないようにしているの。中を除かなければ猫が生きているのか、死んでいるのかは分からないからよ」

「シュレディンガーの猫なんて手垢が付き過ぎてる！」その主張にも青娥は全く揺るぎない。「どちらにしても未踏時代に行くことはできないわ」

「そう、さっきも言ったけどだからこそその精密な観測者なの。時を垣間見て、我らを再度その時代へと誘うのよ。手伝って頂けるわよね？」

「そういう約束をしたからしようがないわね」

「ちよつと蓮子！」勝手に決めたのが不服だったのかメリーは甲高い声をあげる。「この人はわたしたちの予想以上におかしいわよ。

聖徳太子がいるとか、サラエボで皇太子が暗殺されたとか、タイタニックが氷山にぶつかって沈没したとか、どれも事実でないことばかり」

「あら、随分と頭が固いのね。特別な目を持った友人を持っているというのに」

「それとこれとは関係ないでしょ。わたしはその友人に危害を加えられる可能性を危ぶんでいるだけ」

メリーが頑なに言い募ると、青娥は頬を引き締めてメリーに冷たく言葉を返す。

「根拠なんて与えられるわけがない。過去が変わったとして未来に

生きる人間にはそれが認識できるはずないもの。時間そのものから外れる特別な力でも持っていない限りはね。そこはわたしを信じて欲しいとしか言いようがないのだけど……まあ自業自得か、いざというとき信じてもらえないというのは」

もしかしたら演技かもしれないけれど、それでも青娥の態度には胸の痛むものがあつた。わたしは両親が割合に理解者だったから目のことでは嘘つき呼ばわりされるに留まつたけれど、唇を噛みしめている様子からしてメリーには強く思い当たる節があつたらしい。わなわなと体を震わせ、ちらちらとわたしを見ている。信じられないうことを信じてやりたい、でもわたしの身が心配だと言いたげだつた。

「時に何らかの意志が介在するのは確かよ。あるいは時そのものかもしれない」青娥はそう絞り出すように言う。「だとしてもそれは

わたしたちを助けてくれない。人は皆、年老いることから逃れられない。わたしのような仙人や芳香のような尸人でさえ緩慢な滅びの途を辿っている。そしてそれらは全て時の仕業であり、個々人を斟酌したりはしない。辻褃合わせだけは一丁前の癖に」

そして青娥はわたしとメリーに向け、熱っぽい表情を向ける。

「取り澄ましている時というやつに一矢報いたいと思うのはそんなに悪いことかしら？」

「そりゃ悪いことじゃないかな」わたしは空気を読んでいないと分かっていたがそう口にせずにはいられなかった。「個人の都合で過去を変えて、運命を歪められるなんてたまったものではないわ。それに貴女はそんなにロマンチストではないでしょ？ わたしたちと違って。時間なんてどうでもいい、本当はもっと別の深刻な問題があるのよ。それを打ち明けてくれなきゃ、わたしは協力しないわ」

わたしの発言に青娥は齒を食い縛り、余裕なく睨みつけてくる。余程の急所を抉ったに違いなかった。

「分かったわ。わたしはね、罪人なの」まあそんなこともあるかなと思っていたのでわたしも、そしておそらくは同じ理由でメリーも驚くことはなかった。「大陸にいたときちよつとやり過ぎたの。で、こちらに渡ってきて悟られぬよう密やかに暮らしていたのだけど、今から千年ほど前に尻尾をつかまれてしまったの。老君のやつ、愚弄した相手には本当に容赦しないんだから嫌になるわ」

青娥の言う老君というのが誰かは分からないけれど、青娥をあっさりやり込めるほどの存在であることは分かった。

「度重なる道々ならぬ行為、そして鬼籍の逸脱によりわたしは丹に練られるところだったけど、ある条件を果たせば見逃してくれると約束してくれたの。この国の過去に生まれた偉人、聖徳太子を暗殺

せよと。虚構の偉人を殺せと言われたとき、わたしは張り子の虎を縛れという意味合いに受け取ったのだけど、老君は極めて渋い顔をしたわ。だから話だけは聞いてみることにしたわ。そして案内されたのがこの航時器の中だったというわけ」

「それで貴女は実際に過去へ行ってみた？」

「ええ、そうよ。そこでわたしは聖徳太子……いいえ、聖なる徳だなんて生易しいものではなかったわ。その時代で生まれていたのは全てを紫の光で焼き尽くす恐るべき魔王だったの。そいつは当時の日本はおろか半島や大陸、更にはその先までを容赦なく破壊していった。支配するのではなく、ただ力を振るって壊したいという意志だけでいくつもの文明を葬ってしまったのよ」

そのような怪人物が現れたという事実はないが、青娥の恐れようを見ているととても虚構の存在には思えなかった。

「わたしはその怪物に挑んで瞬く間に半死状態にされ、命からがら逃れるしかなかったの。航時器で現代に戻ると死ぬよりもなお不可能な難題を課したことに對して容赦なく苛立ちをぶつけたけど、老君が示した懊悩の深さを見るに他の手段はなさそうで、すると絶望感が押し寄せてきたわ。あんなもの倒せるわけがないし、しかも老君と来たら『あの女を倒すのはそれこそ死んでも無理だが、そうしなければどの道この世は滅びるだろう』と来たものだ。それから手を変え品を変え、十九度の打倒を試みたのだけど全て失敗したわ。ここでの準備と向こうでの生活で千年が経過し、ようやく糸口は見つかったものの今度は航時器自体が動作しなくなった。老君曰く、過去からの突き上げにとりとう時自体が耐えられなくなり、改変を試み始めたのだということだった。おそらく次を逃せば聖徳太子が世界を滅ぼした現実がフィードバックされるとも言っていたわ」

何とも途方のないというか、冗談だとしても流石に笑えなかった。しかしその冗談が上手い青娥の言葉だけにどうやらそれが確からしい、少なくとも真実の一端は含まれているのだということが察せられるのだった。

「そうした曖昧模糊な状態の時代に飛ぶには星読人形では到底無理だし、科学の力が生んだタイムマシンでも不可能であると言われたわ。だからこそわたしには極めて精度の高い星読博士が必要だったの。何としてでも手に入れる必要があったのよ」

「だからあの尸人を使い、強引に取り押さえようとした？」

「丁重に留めおくよう命令していたのよ。それなのに貴女たちのことを食べようとして。もう少し頭を良くしてやるべきかしら」

その辺はわたしたちの誤解であると言いたかったが、青娥は芳香の改造について途端にぶつぶつ呟き始め、言葉を挟める状態ではな

かった。数分して我に返った青娥は大きく咳払いをしてから話を本筋に引き戻した。

「大儀は世界の破壊を防ぐため、わたし自身の欲望としては罪と鬼籍から逃れるため。それが偽らざる動機よ」

青娥は少し居づらそうにわたしとメリーを見る。正直な打ち明けごとというのがあまり得意ではないのかもしれない。

「というわけだけど、どうする？ わたしはまあ、協力しても良いと思うのだけど」

「そうね」メリーは俯いて顎を軽く撫でさすり、それから青娥を正面から見据える。「蓮子にもしものことがあれば、どうやってでも貴女のことを殺してやるから」

「ふむん、了解したわ。まあ一回殺したくらいでは死なないけど」
そう言うと青娥は北斗七星の椅子から星読人形をどかして側に

ゆっくりと寝かし、わたしは椅子の上にそっと座る。固い木で作られているためか少しお尻が痛かったけれど、別段怪しいところはないらしい。続けて上を見ると双眼鏡つきの天球儀がゆっくりと下りてくる。

「中にはいまドームに映されているのと同じ時間、場所が表示されているはずよ。それから徐々に過去へ戻っていくわ。処理が限界を超えたらストップといって頂戴」わたしは双眼鏡に目を当て、すると青娥の言った通りドームの星空と全く同じものがそっくり投射されている。「では始めるわ。時間よ、戻れ」

何の予告もなく星々が逆再生を始める。速度としては平時の百倍ものめまぐるしさだが、特に負担のかかった様子はない。

「もっと早くても大丈夫みたい」

「そう？ 星読人形の限界がその程度なんだけど」百倍速で巻き戻

すということとは千年をおよそ十年かけて移動することになる。復路も同じことをするとなれば二十年、これを十九回繰り返してきたならばそれだけで四百年近い生をこの中で暮らしてきたことになる。

「じゃあ速度をもう少し上げてみようかしら」

夕方の時間になっても星は夜空に瞬いたままである。太陽がなく、星や月が出続けていたらという仮定のもとで投射されているらしいが、わたしはそうした星々でも位置や時間を読めるようであった。空は雲で陰ることもなく、そしてどんどんと過去に巻き戻っていく。一日、一週間、一ヶ月、そして一年が同じ時間で戻り、それでもわたしの目は位置と時間を精確に把握し続けていた。

そして二百年ほど戻ったところで青娥は一度、星の逆再生を止める。

「今が一九一〇年、年号で言うところの大正五年というところね。」

ここで一度外を覗いてみようかしら」青娥が指を鳴らすと、空には現代とまるで異なる、しかし見覚えのある町並みが投射される。着物姿のものもあれば洋装のものもあり、和洋の建築が入り交じった何とも雑然とした様子を醸し出しており、どす黒い煙を吹く自動車が驚くべき鈍さで未舗装の道をがたぴしと進んでいくのだった。

「映像だけで不満というのであれば外を案内してあげるけれど」

「いえ、いいわ。それよりいくつか質問んだけど」メリーは青娥に信用ならぬという表情を向けている。「蓮子の目もつと遅い場合はどうしたのかしら？」

「わたしは彼女の眼を信じていたわ」青娥はにっこりと笑う。「この時代の人間が生み出したタイムマシンなら一瞬みたいだけどね。アンカーを引っかけて潜行するのもまあ一緒か。だから千五百年巻き戻ったら自動的に同じ時間だけ未来に戻る。例えば二一五年か

ら千五百年前の六一五年に五年かけて到着したとして、そこで五年を過ぎて六二〇年になるとする。この航時器は自動的にそこから千五百年後プラス行き来にかかった十年を足して、最終的には二一三〇年に帰還するわけ。どうしてこういう仕様になっているかはご存じの通りだと思うけど」

「そうしないと同一の時間軸に復帰できないから」

「そう。このことと同じくらいしっかりと宇宙だったらまだ暮らしていけるけれど、非常に脆い宇宙に接続する可能性もあるし、そうした宇宙の方が全体的に見ると圧倒的に多いわけね。まあどちらも嫌だからアンカーをかけるしかない。航時器のデメリットは時間移動に大きな時間がかかることね。だからわたしのような長い寿命を持つものか、極めて優れた星読の能力者にしか使えない。ただし貴女たちのタイムマシンと違い、航時器だと知識や技術の持ち込み制限

が緩いみたい。流石に最新の機械や武器などは持ち込めないけど」
タイムマシンでは時代にそぐわぬ者を送り込むことすら許可されないのだから、確かにそれは利点と言えそうだった。

「過去への干渉にも多少寛容であるように思えるわ。人間にとってみれば一瞬で戻って来られるタイムマシンの方が有り難いのでしようけど。仙というものが道を正す存在であるのだから、見られるだけで変えられないものなんて作るはずがないということかしら」

あるいは人間を越えるような存在に対しては時もある程度諦めていると言えるのかもしれない。ましてやこの世界を滅ぼすような魔王の所業ならばいくら抗おうとしても留めるのは難しいだろう。しかしだとしたら、この世界も大概脆いということになる。あるいは過去と未来の境界があやふやであるか、あるいはメリーなら表現するのかもしれない。

「さて、疑問も尽きたならば再び潜りたいのだけど良いかしら」古き時代の京都が消え去り、空には再び星と月が投影される。「先程までの早さなら三十分もすれば下りられるはず。次は封鎖された時代の片方の端まで行きましようか」

「わたしはもう少し早くても大丈夫そうなんだけど」

「人間の集中力が続くのは五十分と見ておきなさい。ゲームは一日一時間と言った旧時代の偉人もいるわ」

わたしは渋々頷くと椅子に座り直し、再び双眼鏡で天球儀の内側を覗き込む。同時に目まぐるしい速さで過去へと進んでいく。わたしはその流れを飽きることなく眺め続ける。

ストップと声がかかり、わたしは不意に我を取り戻す。同じことを繰り返していたせいかわたしは自分が星を見る機械になったかのような錯覚を感じ、わたしは慌てて目を閉じる。双眼鏡から目を離し、空を

見上げると灰色を基調としたざらざらのっぺりした砂のような波が現れていた。

「やっぱり駄目だわ。あなたの目でも入り込めないみたい」

「昔のテレビが放映時間外になるとあんな感じになったらしいけど」二十世紀から二十一世紀半ばまで動画コンテンツは流す時間が厳格に決まっていた、ろくにコピーもできなかったらしい。そのサインとしてあのざらざらを流していたというのはわたしも聞いたことがあったけど、実物を見るのは初めてだった。「つまりこの時代を映すことはできませんってことか」

「もっと過去に行けば着地できると思うけどそれじゃ駄目なのよね……忌々し」

「どうして？ 昔から根回ししておいた方が成功しそうな気もするけど」

「それを考えないはずがないじゃない」わたしの疑問に、青娥はまるで馬鹿にするような口調で返す。「最初は赤子の頃を狙おうとしたのだけど上手く行かない。次に母親や父親を狙ったけどそれも駄目。更に遡って殺そうとしたら、あり得ないタイミングで気付かれるわ、追い縋って狙い打つても奇跡的に当たらない、挙げ句の果てには隕石が突然、頭の上にぶつかってきたのよ。馬鹿にされてるとしか思えなかったわ」

時の復元力なるものは青娥ほどの人物をもつてしても不可避であるらしい。口が悪くなったのもそのことに苛立ちを覚えていたからなのだろう。

「太子が魔王として覚醒する、わたしがデッドリミットと呼んでいる瞬間があるのだけど、そこからできるだけ距離が近い場所に着陸する。直接的な策謀を避け、その時代に暮らす人間が自発的に行動

するように仕向ける。前回は蘇我稻目が頭角を現し出す頃を狙ってこれまでで一番成功に近付いたから、今回もできればその周辺に着地したいんだけど」

青娥の口振りはそのようなものがあるはずがないと言いたげであった。望みが潰えかけているせいかどうかどうにも自暴自棄になりかけているようだった。

「わたしも手伝うわ」メリーはしょうがないなとばかりに手をあげる。「ものの隙間とかそういうのを見るのが得意だから」

青娥はメリーの眼を軽く覗き、今更ながらその異質さに気付いたのか嫌そうに顔をしかめた。

「今まで蓮子ばかり見ていたけど、こちらの眼も大概だわ。類は友を呼ぶ……しかしこれは天の配剤とも言えそうね」青娥はメリーの手を強く握りしめる。「わたしに判断できないものが貴女にならで

きるかもしれない」

「蓮子がやるならわたしもやるわ」メリーはわたしの目を青娥の肩越しに見る。小さく頷くと、メリーは青娥の手を握り返し、ざらざらの空を見上げる。「準備は良いかしら？」

わたしは双眼鏡に目を当て、親指を立てる。

「あなたたちが人の身では等倍というわけには行かないでしょう。先程までと同じ速さで操作してみるわ。五十年を一分で移動する」

「巻き戻しはできるの？」

「ええ。戻るときの動きが少し複雑になるけどね。それではやってみましょう。上手くいけば良いけど」

青娥は指を鳴らし、再び過去に遡っていく。あつという間に三百年をジャンプし、眼前には四百七十四年の新年、〇〇時〇〇分〇〇秒の空が映し出される。双眼鏡から目を離し、ドームを見るとざら

ざらした映像のまままだ。どうやら上手くいかなかったらしい。

「何も見えなかったの？」何気なく声をかけると、青娥が指を口に立てる。それでメリーがまるで魅入られたように天井を眺めているのが見えた。わたしはできるだけ声を抑え、青娥に訊ねる。「メリーは一体どうしたの？」

「おそらく処理が追いついてないの。芳香に難しいことを習わせるとよくこういう反応を示すのだけど、彼女の場合はきつと桁違いの処理が走ってるに違いないわ」

計算機に似た処理の最中ということだが、人間はそうした処理を半ば自在に操ることができるとは。それができないメリーはあまり健全でないというか、在り方として良くない気がする。

「能力に対して人間の脳程度では到底処理が追いつかないの。彼女に十分な演算能力と記憶空間を与えてやれば、さぞ恐ろしい怪物に

なるのでしょね

「メリーはメリーよ」青娥の言い種が気に入らなくて、わたしは素っ気なく返す。「分かったような口を聞かないで頂戴」

「人間ってどうして、自分にとって都合の悪い忠告を感情的に拒絶するのかしら」青娥はわざとらしく溜息をつく。「まあこれ以上議論しても平行線でしょうし、ほら……愛しの姫が目覚めるわよ」

メリーの焦点が合い、視線を落として辺りを見回す。

「あら、蓮子ったらいつの間に」

「もう観測は終わったのよ。それで穴は見つかったかしら」

「一つだけ」メリーは人差し指だけを立てる。「二分三十秒辺り……もう少し早いくらいね」

青娥はメリーの指摘に渋い顔つきを見せる。

「遅すぎる。五百七十年付近ってことは皇子……聖徳太子が生まれ

た頃よ。根回しが間に合わないわ」青娥はメリーに乞うような視線を向ける。「本当にそれだけだった？」

「他にはなかったわ。わたしより強い眼があればもっと見つけられたかもしれないけど」

「背に腹は変えられないということか……」そう呟くと青娥はわたしとメリーに笑いかけた。「ごめんけど、もう一頑張りだけお願いするわ。五百七十年までこれまでと同じ速さで巻き戻して、それから速度を十分の一にする。つまり五年を一分で移動する計算になる」

「それなら朝飯前ね」わたしはまだ少しぼんやりしている様子のメリーに声をかける。「それよりメリーは大丈夫？ 随分と消耗してるようだけど」

「いえ、大丈夫よ。むしろ頭の中が暖まって、いつもより性能が

高い感じ」

「機械じゃないんだから発熱は悪い兆候よ。青娥だって少し休んだくらいで怒ったりはしないはずよ」

「ええ。むしろ最大性能を発揮してもらえないことの方が問題だわ」

青娥が助け船をくれたけれどメリーは頑なな態度を崩そうとしな
い。

「さつき見えたものが再度見えるほど境界は悠長じゃないのよ。それに本当に無理はしてないから」

穏やかながらも強い剣幕で言われると、わたしはもちろんのこと青娥ですら逆らえないようであった。それならできるだけ早く済ませようと、わたしは配置について気合を入れる。先程とは逆方向に星が流れて一瞬眩暈のようになっただけれどすぐに立て直し、未来

に進む星を視ていく。少しするとその動きが一気に遅くなり、わたしは小さく息をつく。自分では平気だと思っていたけれど、一分を五十年で移動するめまぐるしさだと流石にそれなりの負荷にはなっていたらしい。

じりじりと進む星の流れを見つめながら、心の中で一月と一年が過ぎるごとにカウントしていく。五七一年、五七二年、五七三年……十月、十一月、十二月……そして五七四年……。

「止めて！」メリーが大声をあげ、星の動きが止まる。五七四年一月一日〇〇時〇〇分〇〇秒。「ここよ。頭上に見える。大きな亀裂……沢山の眼がこちらを覗き込んでいる！」

わたしは双眼鏡から離れ、天井を見上げるもののざらざらとした灰色が映っているだけだ。青娥も最初はそうだったが、どこから取り出したのかべっこう色のレンズが入った眼鏡を取り出してか

け、その次には驚愕で目と口を見開いていた。

「誰かが化石を掘り当てた跡だわ。聖徳太子なんてものが歴史に現れたのもそのせいなの？」

「化石って、一体何の？」

「時の化石よ。あることは分かっていたけど、実物を見たことはないし発掘跡を見つけるのもこれが初めてだわ」

「わたしがこれまでに見つけた境界の中にも同様のものがいくつかあったわ。そこを抜けるとわたしの知らない場所へと辿り着くことができたの」

メリーの言葉に青娥は深く考え込んでいたが、地面に手をつくると芳香を引っ張り出し、天井を指さした。

「あそこには大きな境界があるの。壁に見えるけど通り抜けられるはずよ。外を一目見てすぐ引き返して来なさい」

「あいさー了解！」芳香はふわふわ空に浮かび、当然のように天井をすり抜けていく。一分ほどで戻ってきた彼女は特に傷ついた様子もなかった。「田んぼや畑が広がっていて、所々にいくつかの家が見えただけ。他にはなーんもなかったな。明るくなればもつと見えるかもしれないが」

「この隙間が京都に繋がっているとすれば、都市の痕跡もないというのは相当の昔だわ。あとは実際に確認できれば良いのだけど」

「わたしが外に出ればいいんじゃない？ 位置と時間を視るわ」

「ふむん、ではお願いするわ」そう言って青娥はゆっくりとしゃがむ。「わたしの背中に捕まりなさい。芳香はもう一人のお客様を背負って。くれぐれも食べたら駄目よ」

「分かったー、舐めるだけにするー」

「舐めるのも駄目」青娥が叱ると芳香はしゅんとなり、手を前への

ばしたままほんの少しだけ背を曲げる。「わたしではこれが限界なので飛び乗ってくれたまえよ」

そんなことしたら背骨が折れて大惨事になるのではと思ったが、メリーは特に躊躇うことなくしがみつき、そのまま風船のように浮かんでいく。青娥は霞のように優雅に浮かぶと、天井に迫っても速度を落とすことなく、わたしは思わず目を瞑ってしまった。次に目を開けると、時間が自然に経過する天然の空がわたしの目の前に広がったのだった。

「五七四年一月一日〇〇時〇五分二六秒、二七秒……経度と緯度は京都東部、卯京都高等学府のすぐ近くだわ」

「つまるどころ成功ってわけか」青娥はそう呟くとわたしをやるわり地面に下ろす。「首の皮一枚繋がったってことね、やれやれ」

「辺りが真っ暗で過去に來た感じが全くしないわ」メリーは芳香か

ら下りると、飛び出してきた地面を見る。「上から見下ろすと本当に不気味だわ。目が笑ってるように見える」

「まあ時間移動を許可する楔になってくれたんだからわたしとしては万々歳だけど」青娥はわたしたちの方を向き、大きく頭を下げる。これまで不遜な態度を取り続けてきた彼女には申し訳ないけれどあまり似合わない仕草だった。「ありがとう。あなたたちを見出せていなければ、わたしはにっちもさっちも行かなくなっていたわ。本当ならばお礼の品でも差し上げたいところだけど」

「いやー、色々面白い体験ができましたから」わたしはそう言っ
て笑みをこぼす。メリーは唇を尖らせているけれど、片目を瞑って
合図を送る。「どうしても言うならば一つだけ教えて欲しいこと
があるんです」

わたしは抜け出してきた場所を指さす。見えてはいないけれど恐

らく境界があるはずだ。

「わたしたちはこういったものを探る活動をしているの。貴女が知っていることを少しばかり教えてくれたらこの長い長い旅の駄賃としては十分にお釣りが来るわ」

「境界の探索者ということ？ 何のために？」

「そこに境界があるからよ」

「昔の登山者みたいなことを言うのね」青娥はくすりと笑い声をもたず。「こんなものを伊達酔狂で探すような人間がいるとは思えない。旧時代の魔法使いや類する探求者なら別として。それとも貴女は魔法使いを自認しているの？」

「わたしはただの人間よ。ただ、そうした穴があることを示したいの……誰も教えてくれないから」わたしの師事している教授はその手の専門家であるはずなのに、嫌がらせのように旧科学系の内容し

か研究させてくれないのだ。「覆し難い証拠を見つければ、誰も無視できなくなるわ」

「ふむん、人間らしい欲望が感じられて素敵だわ。それだけなら良いのだけど」青娥は他にも深い意図があるのではないかということを示唆するが、特に何も問うて来ることはなかった。「といても、わたしも大したことは知らないの。この世界には時を圧縮した化石のようなものが至るところに埋まっていて、だけど本来ならば決して取り出すことができないの。でも誰かがそれを見出し、掘り出しているのよ」

「わたしと同じ目を持った人間が？」

「それよりも上等なのだと思うわ。貴女は境界を視るだけのようだけど、こじ開けて掘り開ける力を持った人間がこの世界にはいるのでしょうね。今回わたしはその穴に助けられたわけだけど、そもそ

も聖徳太子なる人物が発生したのは穴が開いてしまったからかもしれない」

だとすると、世界の理屈を力業でひっくり返すことのできる存在が少なくとも一人以上はいるというわけだ。そう考えると少しばかりぞっとしないことだし、かつてそのために決して忘れてはならないことを知らずに失っていたりするのもしれない。

「まあ、わたしはやるべきことをやるだけ。それ以降のことは知らないし、更に歴史を変えられてもどうせわたしには知りようもないわ……分かち合いたいと思う人ももういないし」

青娥は一瞬だけ寂しそうな顔をしたが、すぐ陽気な笑顔を取り戻す。

「わたしが抱えている情報はこのくらいだけど参考になったかしら？」

「ええ、腹の足しにはなりました」

「それなら幸い。さて、貴女たちはどうする？　少しだけならこの時代を案内してあげてもいいけど」

「わたしはすぐ帰りたいな」メリーなら少しばかり興味があるかと思つたが、大きく首を横に振つた。「霧が晴れればこの時代にもまた来られるようになるでしょうし、貴女の行動の結果は歴史という形で見ることが出来るだろうから」

「本に名前が出るような迂闊な真似はしないわ。では帰りも背負つてあげましょう。それから帰還のタイマーを入れ、貴女たちは元の時代に帰る。わたしたちはこの時代に骨を埋める。任務を果たしたところで鬼籍を見逃してもらえない保障もないし、あの未来はわたしには些かきついから」

青娥はすつきりとした顔で前を向く。もはや残してきた時代への

未練はないのだろう。あるにしてもぐっと飲み込んで堪えているのかもしれないが。

わたしは青娥に、メリーは芳香に背負われて境界を抜け、航時器の中に戻る。芳香はメリーを下ろすと青娥の後ろにぴたりとつき、青娥は椅子に描かれている七つの星を上から順番に押していく。これが帰還のためのコードであるらしく、航時器字体が微かに震えて大きな音を立てた。

「準備完了、それではお二人ともお達者で。わたしのように邪な仙が言えた義理ではないかもしれないけど、貴女たちが道を外さないことを祈っているわ」

そうして青娥は再び境界を通り抜けていく。空の星はゆっくりと過去に向かい、それから大きく速度を上げたかと思うと四七四年で止まり、同じ速度で今度は未来に進んでいく。二一五年まで一気

に戻っていくのだろう。

「やれやれ、何とも奇妙な出来事だったわね」めまぐるしく変わる空はなるべく視界に映らないようにして、すると視線は自ずとメリーの方を向く。その顔は浮かかない様子であり、若干俯いていて空もわたしも避けているように思えた。「何か気になることがあったの？」

何かを考えている様子なのかメリーは微動だにしなかったが、突如として顔を上げるとわたしの目の前まで来て強く手を握りしめる。

「あの女の人が正しいならば、わたしたちは知らずに大切なことを忘れているかもしれない」

「メリーにはそんな記憶……直観めいたものがあるの？」

「ううん。わたしは蓮子のこと忘れたくないって思っただけ」

「そりやまあ。でも仕方ないものでもあるしさ、もしわたしの存在自体がなくなってしまうたら、メリーはそのことで悔やむ必要がないじゃん。だからさ、例えばのつぴきならない事情で離れ離れになるよりもよほど、ましかなという気はする」

「わたしは忘れないわ」メリーは手を離すと、わたしをその柔らかい体で包み込むように抱きしめてくる。「そうなっても決して忘れない。だからわたしや蓮子の過去を変えてこようとする人間がいたらきつと許せないわ」

メリーの目が、わたしをじっと見つめてくる。物事の境目を視ることのできるその目はわたしの何を読みとっているのだろうか。対するわたしはこの目でメリーの何も読んであげることができない。いつもは気にならないのに今はそれが少し残念に思えた。

「この目にかけて、退けてやる」

そして瞳をぎらぎら輝かせるメリーが少しだけ怖いと思った。

星の動きが止むと同時に建物全体が大きく震え、微かに押さえつけるような心地を覚えた。緩やかに上昇しているのだと気付き、そのまま少し待っているると再び大きな震動があり、浮き上がるような感覚とともに停止したようだった。

「どうやら浮上しきつたみたいね」

「地上に出たのはいいけど、どこから外に出るのかしら」

「八つの扉のうちどこかじゃない？」わたしは乾という文字の刻まれた扉を開けてみたが、中には何も無い。メリーも手分けして調べてくれた結果、神という文字の刻まれた扉の、向かい側の壁に両開きの扉があり、それを開くと現代の夜空へと出ることができた。振り返るとかつて古びたお堂のあった所に八角形の建物があり、周囲の

墓石や卒塔婆とそぐわぬ異国感を放っている。「外部との通信が回復。ようやく現代に戻ってきたという実感が沸いてきたわ」

「そうね、この妙な建物を見て驚く人は多そうだけど」

メリーがそんなことを言うと同時に、お堂は地上からあっさりと浮き上がり、空高くまで舞い上がると西の空に消えてしまった。

「もしかして、元の持ち主の所に戻ったのかな？」

「借り物だとは言っていたけど」もしかするとこれからもことあるごとに利用できるかなと考えていただけにさっさと回収されてしまったのは何とも残念ではあった。アンカーでも打ち込んでおくべきだったのかもしれない。「さて、それでは帰りましょうか。もうあの仙人は出てこないはずだし」

そう切り出すと、メリーはそれでも浮かない顔をする。今夜くらいは側についてあげてあげべきかなと思ひ、目で促したがそれでも

ぼんやりとしたままだった。

「どうしたの？ 何か考え事でも？」

「データを照合してたの、聖徳太子について」メリーは調べたデータをわたしに共有する。そこには聖徳太子こと厩戸皇子が成し遂げた、業績の数々が書かれている。律令や憲法を始めとしてこの国に礎を据えた偉人。昨日までは偽史だったことが歴然とした事実となっていた。「あの女は聖徳太子を殺すと言っていたわ。でも歴史には大々的に残っている。もしかして失敗してしまったのかと思っただけ、魔王のような怪物が世を席卷したという真実もないの。彼女は一体何を成し遂げたのかしら？」

メリーに分からないならばわたしに察することはできないだろう。一つ分かるとすれば青娥はわたしに何かを隠していたということだ。狸に化かされていたような気持ちで顔を見合わせていると、

砂礫を踏みしめる微かな足音が聞こえてきた。それは先日に顔を合
わせ、わたしを助けてくれようとした老婆であった。

「ふむん、半信半疑で来てみたがまさか本当にいるとはな」

老婆はわたしの顔をまじまじと見据える。

「黒髪の娘が宇佐見蓮子、そして金髪の娘がマエリベリー・ハーン
かな？」

「その通りだけど。先日は助けて頂き、どうもありがとうございま
した」

礼を言って頭を下げると、老婆は大きく息をついた。

「あの女の子だから担ごうとしていたのかと思ったが」

「あの女って霍青娥のことですか？」わたしの質問に老婆は大きく
頷く。「先日はお互いに知らない相手のようでしたけど。今は知っ
ている？」

「察しがいいね。あの女はこう打ち明けたんだ。わたしは聖徳太子のいない未来からやってきた人間なのだよね。わたしは散逸してしまった幻想を悼み、京都の地で一人暮らすお前に出会ったことがあるのだと。何を言っているのかさっぱり分からなかったが、あの女はそれならそれでいい、ある時間にこちらへ戻ってくる二人への伝言を預かってくれと言ったのさ」

「いつどこに現れるのが分かっているなら直接会いにすれば良いのに」

メリーが不貞腐れたように言うとお婆も眉を潜めてしまった。

「あの女がいまどうしているか、わたしも良くは知らないのさ。数年前に二人宛の伝言を伝えたきり消息を聞かない。達者でやっているとは思うがね。来歴を知りたいならば長い話になるけれど聞いていくから?」

わたしたちは老婆を通じて、霍青娥なる仙人の行く末を知った。如何なる経緯を辿ったのか聖徳太子は仙人となり、二人の妻とともに幻想郷なる不思議な場所で復活した。青娥は彼女たちのアドバイザーとしてしばらくその地で活動したのち、誰にも告げずそこから立ち去ってしまったということ。どうやら青娥は魔王になるはずの人物を何らかの手段によって矯正することに成功したらしかった。

「太子……あそこでは豊聡耳神子と名乗っていたが、彼女は何も言わなかったから恐らくは事情を察していたのだろう。まああいつのことだからこんな時代でもろくでもないことをしているのだろうよ」

そう言つて老婆は苦笑する。彼女自身もそのろくでもないことに巻き込まれた一人であるらしい。

「それで、彼女はわたしたちになんと？」

素直な感謝の言葉ではないと思っていたが、老婆が苦虫を嚙み潰したような顔になったので、本当にろくでもないのだと分かった。

「おめでとう、世界は救われた、あなたたち二人のお陰で」

「……いやはや大袈裟なことだわ」

メリーは肩を竦めるが、老婆は顔色を変えなかった。

「それからこうも言っていた。二人の関係を世界が阻むだろう。努々気をつけるように」

「世界？」あまりにも漠然としたことであり、わたしは鸚鵡返しにせざるを得なかった。「何ですか、それは？」

「問い質したが青娥にも確証はなかったらしく、詳細については教えてもらえなかった。だから残念ながらわたしには何も手を貸すことができない」

危機があることは分かっても、何をして良いのか分からないならば対処の仕様がなく不安ばかりが募るだけだ。それでも伝えなければならぬことだとしたら余程のことに違ひなかつた

「わたしからの用件はそれだけだ、不親切に思えたら済まない。もし何か分からないことがあれば遠慮なくわたしを訊ねて欲しい」
老婆は自分の氏名と所在地をわたしとメリーに投げて寄越す。

「ありがとうございます、と言うべきなんでしょうね」

メリーがそう口にして頭を下げ、わたしもその後が続く。老婆はそこで初めて素直に微笑んだ。

「気にすることは無い。それよりもあいつの不吉な忠告が当たらないことを祈っているよ」

そう残すと老婆はいつぞやと同じく柄杓と手桶を背に、この場を立ち去っていく。メリーならば世界なるものの正体にも検討がつい

ているかと思つて視線を送つたが、メリーはただ震えたままわたしの手をそつと握りしめる。何か恐ろしい予感のようなものを覚えたらしいが、わたしにはやはり共有して恐怖してやることができな
い。そのことをもどかしく思いながら、わたしはメリーの手を握り返すのだった。

青娥の忠告が何を指すのか分かるのは結局、事の次第が明らかに
なつた後だった。

わたしたちは世界を書き換える怪物に遭遇し、蓬萊の社と呼ばれ
る恐るべき黄泉の遺物と関わり合うことになる。

これからしばらくのち、東京での出来事である。

タイムマシン・ガール

2013年11月03日 科学世紀のカフェテラス発行

著者 : 仮面の男

<http://maskman.jp/>
ulick.norman@gmail.com

本作品は「東方Project」の二次創作作品です。
東方Projectは「上海アリス幻楽団」の著作物です。